

MY BCL LIFE



【MY BCL LIFE～はじめに】

私は子供の頃から、どういう訳かラジオとか無線とか電子工作とかそういった類のものが好きであった。古くは小学校2年生位のときであったろうか、トランシーバーに死ぬほど憧れて、親に頼んで買ってもらったのが原点であったように思う（これは5石だったか6石だったか、全くのオモチャ）。その後数年経って日本にBCLブームが巻き起こり、私もふとしたきっかけでその世界に入り込み、小学校高学年～中学時代の約5年間を夢中になって過ごした。そして高校進学と共に時間がとりにくくなり、またブームも去りこの趣味から離れてしまったが、今から思えば痛恨の極みである。

その後BCLは私の脳裏からすっかり消えてしまっていた。30歳近くなってアクションバンドという世界があるのを初めて知り、少し電波を追った時期もあったが、一通りの種類の電波を聞いてしまうと飽きてしまった。また丁度このとき仲間内でレジャー用にアマチュア無線が流行ったので、遅まきながら免許を取り電波なども出してみた（アクションバンドはこのとき購入したハンディ機を受信改造して聞いたのである）。しかし不特定多数の人と交わしている会話が自分にはどうにも楽しいものとは思えず、電波を出すことは殆どなかった。

そうして36歳になって、全くふとしたきっかけでまたBCLに戻ることになった。実に20年ぶりのことであった。以来3年・・・正直ここまでのめりこんで打ち込むとは思わなかった。少年時代に比べて金銭的に自由になり、また語学や技術に対しても多少は分かるようになり、自動車などの飛び道

具が使えるようになり、そして極めつけはインターネットという素晴らしいコミュニケーションメディアが出現したお陰で、時間はないもののその密度の濃さは大きく昔を上回った。やはりBCLはもちろん少年でも楽しいが、本来的には大人の趣味だったのである。

ということで大いに楽しんだ日々であり、その楽しみを多くの人に伝えたく「MY BCL LIFE」というサイトを立ち上げている。いろいろ自由に書いてきたが、HPだけでは飽きたらず今回「バーチャル書籍」としてまとめてみることにした。これは私の書籍に対する憧れを、自分自身で実現しようというものである。ブーム当時あれほどあった書籍や雑誌は、今は国内にはない。この状況が寂しくて仕方がないのだが、ならば自分で書いて寂しさを埋めてしまえばいいではないかという発想である。幸い現代はワープロソフトもあればデジカメもあり、自分で原稿は作れる。そして書店に置いてもらわなくても、自分のWebページにアップしておけば多くの方に見て頂ける。

多くはサイトにアップしたコンテンツの再編集であり、ブックマーク頂いていたとしたら既に聞いた話もあるかも知れないが、今回はなるべく写真を多く入れたり、後から思い出したことなどを追加したりした。

別に読む方に何かノウハウをご提供しようとかそんな大それた気持ちでやっているのではなく、あくまで自己満足の書であり、趣味を同じくする方が暇つぶしに読んで楽しんで頂ければくらいの気持ちで書いている。ご覧頂いて、ご感想などお聞かせ頂ければ幸いです。

2003年12月 著者

目次

少年時代編

- BCL との出会いと最初の苦労・・・4
- 語学の壁と「短波」誌、NSB の BCL 番組、
日本 BCL 連盟・・・6
- 2 台のリグ・・・7
- アンテナの思い出・・・9
- アンテナカップラーの思い出・・・10
- インドネシア DX にはまる・・・11
- 9R59D に憧れて（前編）・・・11
- 短波誌への投稿・・・12
- BCL からのリタイア・・・13

復活後編

- 復活・・・14
- 2 台のリグ・・・14
- 9R59D に憧れて（後編）・・・15
- RAE を受信する・・・16
- T2FD 完成・・・17
- ミーティングへの参加・・・18
- 日本 BCL 連盟を訪ねる・・・19
- FRG-7 復活・・・19
- アンテナについて・・・21
- 個人輸入・・・24
- ALA-1530 顛末記・・・25
- ハムフェアに参加する・・・27
- 記念の受信テープと MD・・・27
- 記録を残す・・・29
- 受信機のコレクション・・・29
- シャックの相互訪問・・・32
- MWDX・・・33
- ペディションの楽しみ・・・34
- BCL と工作・・・36
- 北米中波 DX・・・38
- モバイルワッチの楽しみ・・・39

- DX in Las Vegas・・・41
- 国内中波 DX にはまって・・・44
- BCL 書籍について・・・46
- BCL 書籍を探して・・・48
- 受信報告書を書くということ・・・50
- 秋葉原を歩く・・・52
- インターネット・・・53
- BCL ライフとパソコン・・・54
- V/UHF DX・・・55
- BCL で芽生えた交友関係・・・56

- 終わりに
- BCL ブームよ、もう一度！・・・58

少年時代編

【BCL との出会いと最初の苦労】

BCL との出会いは小学校5年生の頃であった。一番最初に目に触れたのは学校の図書室で「子供の科学」を読んでいたときであった。記事の中で「ラジオを聞いてカードをもらおう」というのがあ



子供の科学 1974年9月号に掲載された記事

り、私の目を引いた。私は元来文系の人間だと思っているが、どういう訳かこのラジオとか無線とか電子工作といったものが好きである。この日子供の科学を読んでいたのも、特別なことではなかった。その記事の内容の詳細までは覚えていないが、どうやら海外の放送が日本でも聞こえるらしいこと、日本向けに日本語による放送が行われていること、受信レポートを送るとベリカードというものがもらえるらしいことが分かった。これは私の興味を大いに引いた。是非とも聞いてみたいし、カードももらってみたい…そこで記事に書かれていた放送局の放送時間と周波数を見るが、周波数は「11810」とか「9725」とかやたらデカい数字が並んでいる。私はまだその頃は短波というものの存在を知らず、私にとっ

てラジオとは「1240 ニッポン放送」といった中波を意味していた。そもそも我が家にはまだ短波ラジオというものがなかった。丁度この頃父親が買ったラジカセ National RQ-448 に、運良く短波がついていたのである。しかしそこに目盛られている「3」と



National RQ-448 ラジカセ

(写真提供：いた氏)



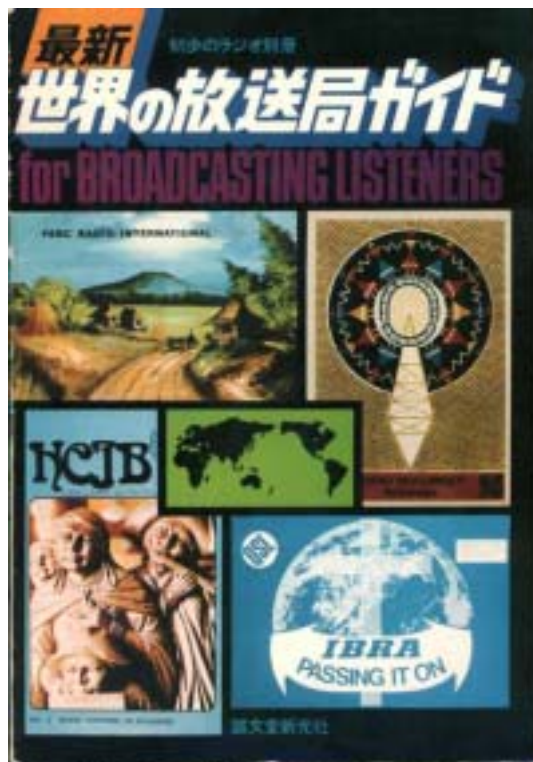
「SW」の目盛が MHz を表すことにやっと気づいたか「12」とかの数字が実は「3000」「12000」を意味するのだということは知らなかった。だから例の記事を見てもすぐにこのラジオで受信できるという発想に至らず、最初は買って間もないラジカセをとにかくいじるというところから始まったように覚えている。そうして初めて「FM」というものの存在を知り、「SW」が短波であることに気づいていったようである。しかも SW からは

訳のわからない外国語の放送が聞こえてくるのである（今から思えば間違いなく北朝鮮）。「ひょっとしてこれか？」という疑念が確信に変わったのは 75 年の 12 月。夜に日本語の電波を捉えたが、内容は全て中国に関するものであり、NSB とは考えられなかった。そして待ち構えていて「こちらは北京放送局です」という ID が出たときには、驚くやら嬉しいやらであった。ついにあの記事にあった放送を受信したのだから -

そして北京放送や NSB を聞いていく中で、やっと 1000KHz = 1MHz であること、今自分が聞いている放送のジャンルが「短波放送」であることを理解した。ここまで気が付くのに、随分時間がかかった。しかしそれに気がつけばあとは楽だ。今一度件の記事を読み返し、書かれていた周波数を一つ一つあたり大半を受信することができた。

さてそんなある日の夕方、6055 の NSB から少し下の方にダイヤルをずらしたときに、やはり日本語の放送が聞こえるのに気付いた。これも NSB っぽくないような気がする。「ハテ、これは何だ？」と耳を澄まして聞いていると、「ボイスオブフレンドシップ。こちらはサンフランシスコの KGEI です。」というアナウンスがでてまたまた驚いた。こんな局があったのか！あのリストにはなかったぞ。一体世の中に日本語放送をやっている局は何局あるのだろうか？新たな疑問が湧いてきた。そう、自分が今まさに始めた趣味の全体像を知りたくなったのである。その問いに答えてくれる手引書はないものだろうか？苦労して探すまでもなく、それは書店でいとも簡単に見つかった。誠文堂新光社刊、板橋聰光氏著「最新 世界

の放送局ガイド」であった。こうした書籍が容易に発見できるとは、いかに BCL がブームであったかを物語っているように思う。



バイブルとなった最新世界の放送局ガイド

そしてこれを読んでやっと大まかな規模感が掴めた。日本語放送をやっている局も 17 局であることが判明した。

さて片やリグについてであるがしばらくは RQ-448 をそのまま使い続けていたが、短波帯は所詮はラジカセのおまけでしかない。したがって 周波数直読もできなければ、3.9~12MHz しか受信できなかった。世界の放送局ガイドでは放送局の紹介だけでなく、沢山の BCL ラジオ・受信機やアンテナ、周辺機器が紹介されており、非常に優れた性能を持つポータブル機も世に出始めていた。同書を読みながら各機種を比較検討して夢を描き始めていたが、小学 6 年生のある日に自宅が集中豪雨で床上浸水の憂き目遭い、1F にあった RQ-448 は壊れ

てしまったのだ。そこで年末に両親に頼んで、新しいラジオを買ってもらうことになった。私が選んだ1台は、クーガー2200と人気を二分したスカイセンサー5900である。ここに「優れた手引書と高性能のリグ」の両方が揃い、いよいよBCLに熱中していくのである。

【語学の壁と「短波」誌、NSBのBCL番組、日本BCL連盟】

こうしてBCL全開の態勢は整ったのだが、困った問題は先も述べたように日本語放送局がたった17局しかないことであった。そのときはまだ中学入学前で英語も理解できなかったし、今後何を聞けばいいのか、特にどうやって日本語以外の放送のIDを確認し、番組内容を理解すればいいのか途方に暮れてしまったのである。しかしこの悩みも間もなく氷解してしまった。IDには決まりきったパターンがあり、それさえ覚えてしまえばとりあえず確認はできること、そして番組内容まで理解しているBCLは殆どいないことに気付いたからであった。

こうしたことに気付くのに役に立ったのは雑誌では「短波」と日本BCL連盟の会報「Hz」であり、放送ではNSBの「ハロージーガム」「BCLスクランブル」「BCLワールドタムタム」であった（「BCL教室」は殆ど聞かなかった）。「短波」はリアルタイム性には欠けるが、幅広く奥深いBCL/DXの世界を高いレベルで教えてくれた、最高のバイブルであった。毎月8日の発売日が楽しみで仕方なかった。またNSBのBCL番組はリアルタイム性が高く、また「音声」で情報を入手できるのでこちらも重宝した。例えばIDの発音など、文字で見ている限り

は（ふりがなでもふっていないければ）読めなかったので大変助かった（SINPOも「シンポ」と読むとは知らなかった）。「ハロージーガム」がBCL番組であることを何故知ったのか覚えていないが、とにかくほぼ毎回といていいほど熱心に聞いていた。

このように一人ではいろいろ悩むことが多いが、先輩や仲間がいればその疑問が一瞬にして解決してしまう可能性もある。何より趣味を同じくする仲間と趣味の話をしてみたい・・・そんな気持ちから日本BCL連盟に入会することになった。前述の「Hz」誌ももちろん良かったが、やはり仲間を得るためのミーティングに参加できるのが一番の魅力であった。自分の周囲には自分と同じくらいBCLに熱中している友人がいなかったからである。最寄で横浜ミーティングがあったがちょっと遠いと思っていたら、間もなく町田にミーティングができたので、そちらに参加することにした。ちなみに初代チーフとして名乗りをあげたのは、現在のB連のMY WAVE誌編集長のK氏である。

町田ミーティングには数回参加した。確かにここにはBCLが本当に好きなメンバーが集まっていたように思う。しかし残念なことに、ここでも本当に趣味の合う仲間は作ることができなかった。中2~3にかけては私自身の志向がDXに向かいつつあったが、同ミーティングでは同じ志向の人が殆どいなかったからである。そこで当時東日本ではDX色が非常に強かった西東京ミーティングに参加することにした。さすがにこちらはDXバリバリといった感じでレベルも高く、むしろ圧倒されるくらいであった。ここなら仲間もできそうに思えた

が、いかんせん遠すぎて、続けて通うことができなかつた。このようにミーティングで気の合う仲間ができていたら、その後のBCLライフは違ったものになっていたかもしれない。

【2台のリグ】

初代リグは一応 RQ-448 であるが、これは自分で選んだわけでもないので実質的なBCL用リグとなると、スカイセンサー5900ということになる。ここでは少年時代に使用した2台 - 5900 と FRG-7 - について感想を述べてみたい。

スカイセンサー5900



スカイセンサー5900

多くの方が仰るように、BCL史に残る名機であると思っている。とにかく周波数が直読できるというのは、革命的な進歩であった。今から思えばクリスタルマーカでゼロピートを取って250kHz毎にメインダイヤルを合わせ、その後スプレッドダイヤルで $\pm 130\text{kHz}$ を調整するなどということは面倒なことこの上ない。特にいろいろな波をワッチするときなど、あまりにも煩わしい操作である。しかし当時の私はそんな操作さえ厭わないほど、周波数が直読できることに感動していた。正直感度とか

選択度とかその他の基本機能がRQ-448に比べてどのくらい優れていたのかは良く分からない。私自身としては周波数直読ができるようになったことと、19mb以上が受信できるようになったことだけで十分満足してしまったのだ。5900の名誉のために付け加えておくが、その他の基本機能ももちろん高かったに違いない。実際に国際放送の大半はこれで聞いたし、アフリカ/南米のDXの入門局も受信できた。しかし自分のスタイルとしてDX志向が強まっていく中で、もっといいリグでもっと難しい局を聞きたくなっていき、DXerが使用している通信型受信機がどうしても欲しくなっていたのである。そこで熟慮の末次のステップとして選んだのは、YAESU FRG-7であった。



シャック関連で唯一残っている79年夏頃の写真

FRG-7



YAESU FRG-7

FRG-7は世界的なベストセラー機であるが、私もこのリグを買って良かったと思っている。実際には中学生に買える通信型受信機の選択肢は多くなく、FRG-7にせざるを得ないという事情もある。しかし買ったのはいいものの正直FRG-7と5900でどこが違うのかは良く分からなかった。最初はその通信機ならではの重厚感・安定感に感激した。もちろん5900では受信できなかった90mb以下が受信できるようになったのは、最高に嬉しいことであった。私のメインエリアはインドネシアであり、90mbが聞けないというのは楽しみの半分をもぎ取られているようなものであったから。

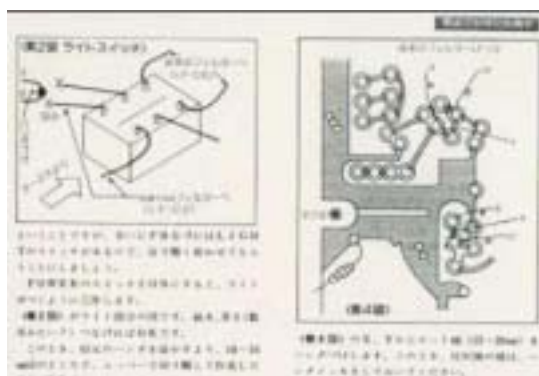
しかし通信型と言いながら欠点も多い。多くのユーザーに共通して指摘されるのは、選択度と多信号特性の悪さである。特に選択度の甘さにより、思ったほどDX局が聞こえなかった。これに関してはHz誌に改造記事が載り安価で改造できることが分かったので、早速実行に移した(後述)。

操作方法は今思うとこれまた極めて煩雑であり、一旦MHzの単位で周波数を合わせ、そのあとメインダイヤルで1000kHz未満をあわせるという方法を取る。しかもプリセクタを最高感度のポジションに合わせなければならず、一局聞くのが大変だった。でもやはりその当時はそんなものだと思って、さほど文句も言わずに使っていた。

いろいろネガティブなことも書いてしまったが、5900もFRG-7も両方好きである。自分の青春時代に付き合ってくれた友達であるし、電波の夢の世界を教えてくれた素晴らしいおもちゃであった。とても感謝している。

FRG-7をNarrow化する

以前よりFRG-7をNarrow化することにより、DXではかなり使えるようになるとの話は聞いており、そのチャンスを待っていたのだった。そしてたまたま出席した西東京ミーティングに、この記事に関してアドバイスなされたというOMさんが出席しておられたので、この機会を逃すまいと教を乞いに進み出たのであった。氏は当時中学生の私に図を描いて丁寧に教えて下さった。それを聞いてこれなら何とかできそうだと確信し、遂にFRG-7のキャビネットを開けることになったのである。



Hz誌に掲載されたFRG-7改造の記事

作業は今から思えば大して難しいものではなかったが、既存のフィルタは活かしつつ、ライトのスイッチを流用して増設したフィルタとともにNarrow-Wideの切替ができるようにするというもの。作業そのものはさして難しくないのだが、家には80Wくらいの太い半田ごてしかなく、随分危なっかしく作業したように記憶している。

そして一応できたように思われたので、お礼を兼ねて氏に電話を入れた。すると氏は簡単なチェックとして「5005のR.Malaysia-Sibuを受信しごらん。」とアドバイスしてくれた。ノーマルのままだと同局は5MHzのJJYの影響でやや聞きづらい。

そこで追加したフィルタに切り替えると、成功したかどうかが一発で分かるのであった。電話口で待っていてくださったので、急いで FRG-7 の電源を入れ、5005 に合わせる。そして Narrow に切り替えると・・・これは衝撃的であった。音がこもると同時に、混信がまさに「スパッ」と切れたのである。これが Narrow Filter か！」ノーマルとは全然違う。これなら俺にも珍局が受信できるぞ！そんな思いが渦巻く中電話に戻り、成功したことを告げお礼を言って電話を切った。

その後は自分の期待通りで、80年にBCL活動を中止するまで、DXで大いに活躍してくれた。改造という行為には賛否両論あるようだが、自分としてはわずかな金額でここまで性能が上がったこと、何よりも自分の手で改造を実施して成功したことに大満足であった。

多信号特性の弱点

しかももう一つの問題である多信号特性の悪さは、そんなにことは単純には行かない。特に49mbではあちこちでラジオたんぱが聞こえてしまい、肝心のLA局が聞こえないという現象が起こっていた。カップラーもどきを作ったりして入力段で不要信号をカットしようとしたが、今ひとつ効果は現れなかった。このことにすっかり嫌気が差してしまい、49mbDXはしなくなってしまう、新しいリグを買うしかないと思うようになった。しかし高校生になったばかりでアルバイトもできず軍資金は調達できそうになかった。このことが私をBCLから引き離してしまった一因でもあり、大変残念なことであった。

【アンテナの思い出】

アンテナに関してもいろいろな思い出がある。最初はロッドアンテナから始めたのだが、もっと良い状態で受信したく間もなく外部アンテナを検討することになった。

たまたま隣家のおじさんは電気系の学校を出て電気工事を自営でやっている方だったので質問しに行ったところ、いろいろと親切に講釈してくれた。そして「これを使ってごらん」と、商売ものの余った電材をくれた。それをリグにつないただけでも、かなりの感度アップが見られた。ロッドアンテナとは大違いである。そこでそれをベランダを使って10mほどの長さに張り、しばらくはそれを使って楽しんでた。

その後一時期使用したのは、RAKのリスナー1というアンテナだった。これは全長は17mだが、折り返してV字型になっており所要スペースは5mで良い。市販品なので期待したが、前述の10mアンテナとパフォーマンスに大差はなく、ほとんど活用した記憶がない。(このリスナー1については購入した記憶がなく、或いは5900かFRG-7のオマケにでも付いてきたのだろうか?)

その後短波誌を愛読していると、「我が家のアンテナ」コーナーに強者が次々と現れるのを見た。自宅に何本もの長いアンテナを張っているBCLもいた。それらに刺激を受け、自分ももう少し良いアンテナを使えばもっと難しい局が聞こえるかもしれない・・・そう思ってアンテナを自作することにした。そこで趣味と実益を兼ねて、中1の夏休みの工作の宿題として、ダブルダブレットアンテナを出品した。

詳細は忘れてしまったが、300のりボンフィーダーや碍子を買ってきて、雑誌を参

考にしながら作った。しかしそのアンテナは、実際にそのままでは使われることはなかった。我が家に設置するには少々長かったのと、何よりマストを立てる材料が思い浮かばなかったからである。そこでしばらく放置されていたのだが、ある日突然陽の目を見ることになった。父親が竹をマストにすることを提案してくれて、実際にどのように立てればいいのかを教えてくれたからである。そこでダブレットアンテナは一旦解体し、単なるロングワイヤーとして使用することになった。

長さはベランダアンテナに比べてかなり長く、エレメントも例の電材の余りよりは良いものだったので、感度もかなり上昇して、それ以降中断するまでのメインアンテナとなっていったのである。

P.S.: アンテナの思い出を辿っていたら、ループアンテナを作ったことを思い出した。当時流行っていた 1m×1m×6 回巻のものである。しかしバリコンを使った記憶がないので、そもそも中波帯に同調していたのかどうか疑わしい。当然パフォーマンスが高い訳がなく、中波 DX もどきもやってみたが、何の成果も上げることができなかった。アンテナに関して今一点覚えているのが、自宅に 100mクラスのロングワイヤーを張ろうとしたこと。勿論自宅の敷地ではない。今も同じ所に住んでいるのだが、自宅と川を挟んだ向かい側は当時は山林だった。ここを使えばそれも夢ではなかった訳である。実際張らせてもらえないかと地主にお願いに行ったが、迂遠な言い回しで断られてしまった。あれが実現していたら大変なことになっていたと思うと、大

変残念である。今や同じ地には 11 階建てのマンションが建っており、受信環境は確実に悪化してしまった。

【アンテナカップラーの思い出】

いかにして DX の成果を上げるか？ひたすらそのことに執念を燃やしていた自分は、アンテナカップラーに目をつけた。そして技術力もないくせに、それを買うのではなく自作することにした。これはお金が無かったせいもあるだろうが。そこでまず B 連のコピーサービスをお願いしてアンテナカップラーの作り方の記事を送ってもらい、それを見ながら部品を買いに行った。



短波誌に掲載されたアンテナカップラーの製作記事

今でこそ部品も自分で買えるようになったが、当時は全くのチンプンカンプンである。とにかく記事を頼りに秋葉原に行き、店のおじさんに聞きながら買い揃えた。今思い出すとラジオデパートで不安気な顔をしてお店を回っていた自分が懐かしい。

しかし部品を揃えたものとても自分で作ろうという気にはならなかった。やはり

自分には無理だと思ったのだった。そこでそちら方面を得意としているクラスメートの S 君に頼んで、部品を預けて作ってもらうことにした。果たしてそれはできがって自分のところに戻ってきた。ただケースは買っていなかったの、むき出してはあったが。まあとりあえず使えればいいのかーそう考えてそのまま使うことにした。しかし残念だったのはカップラーの威力というものをほとんど感じなかったことであつた。もっと劇的な効果が見られることを期待していたのだったが、S メーターがわずかに大きく振れるようになったと感じただけで、凄さを実感することができなかったのである。もっともカップラーの利点はゲインアップだけではなく混変調対策とかそういう観点でも見なければいけなかったのだろうが、全然そういう点を気にとめていなかったのがっかりするだけだった。いずれにしてもカップラーには幻滅してしまい、それ以降使われることはなく知人にあげてしまうことになった。

P.S:カップラーには失望したはずなのに、懲りずに BCL 復活後に既製品を購入した。しかしながら復活後も効果を実感するに至らず、カップラーは売られていってしまった。カップラーに縁がないのか、そもそもカップラーに過大な期待をした自分が悪かったのかも知れないが・・・

【インドネシア DX にはまる】

主だった国際局を概ね聞き終えると、次の段階として DX の領域に入って行った。DX の分野にもいろいろあるが、その中で自分はインドネシアをメインターゲットにした。これにはいろいろな理由がある。まず

第 1 に「適度に」難しいこと。DX は難しいからこそ面白いのだが、さりとて難し過ぎると諦めが先に立ち興味を失う。LADX は自分にとっては少々難しく、従ってインドネシアは難易度が丁度良かった訳である。第 2 に放送している局数が多かったこと。今はすっかり衰退してしまったが、当時は RRI だけで 30 局以上あったのではないだろうか。そして 3 つ目は、時間帯の良さである。中学生だったので極端な早起き、夜更かしはできず、部活動を終えて帰宅して夕食を食べた後からさりと始められるインドネシア DX は中学生にとってとても都合が良かった訳である。その結果 BCL 中断までに 35 局の RRI、1 局の Non-RRI を受信することができて、いっばしのインドネシア DXer 気取りであつた。そして次の段階としては、より難易度の高い Non-RRI にのめりこんでいく筈だったのだが・・・

【9R59D に憧れて(前編)】

中学時代 ICF-5900 FRG-7 と乗り換えて DX へ傾倒して行ったが、FRG-7 は通信型受信機としてはエントリーマシンであり、前述の通り選択度、多信号特性といった基本的な性能が満足のいくものではなかった。そこで先の Narrow 化を実施して選択度に関しては劇的な改善を見たのであつたが、もうひとつの課題である多信号特性の悪さに関してはいかんともし難かつた。特に 49mb における状況は悲惨の一語に尽き、6MHz 付近はラジオたんぱだらけで DX どころではなかつた。

状況を打開するためにいろいろやったがあまり効果はなく、もはやリグを変えるしかないという結論に至つた。そこでマシン

の選定に入る訳だが、ちょうど自分がそんな悩みを持ち始めたころに、10万円前後で買えるダイナミックレンジの広いマシンが出現していた。TRIOのR-1000とYAESUのFRG-7700である。どちらも魅力があったが、それ以上に興味をそそられたのが、往年の名機と言われたTRIOの9R59Dであった。当時のトップDXerの多くが愛用しており、また中古でしか購入できないがその代わり2万円前後で入手できそうだったので、これなら買えると踏んだわけである。周波数読み取りや選択度の点でもノーマルでは使いにくく、安定度も良くないとあって多分にマニアックなマシンであろうとは思ったが、それでもこの「幻の名機」を自分の物として使ってみたかった。何かとんでもない飛躍をもたらしてくれそうな気がしたのである。

実はこの9R59D、この頃個人売買で購入直前まで行ったのである。ミーティングで知り合った方から適価で譲ってもらうという話になったのだが、直前に母親に相談したところ「壊れたときどうするの？保証をしてもらいなさい。」と言われて、売主もそれは出来ないとなって話は流れてしまったのであった。もしあの時9R59Dを入手していたら、或いはBCLを続けていたかも知れないと思うと残念でならない。実際にはR-1000もFRG-7700も何も買わず、BCL自体もそのままフェードアウトしてしまったので。

【短波への投稿】

前にも触れたが、BCL情報誌月刊「短波」は私が最も好きだった雑誌である。とにかくこれが発売される毎月8日が来るのが待

ち遠しく、8日になると必ず本屋に向かったものである。自分にとっての最大の情報源であり、教科書でもあった。

最初は読む方専門だったのだが、何とか自分も投稿して雑誌に載ってみたいものだと思うようになった。そこで時々DXレポート欄に投稿するようになった。しかし当時としては最高レベルのBCL雑誌である。投稿者も多かったろうし、レベルもそこそこ高かったのだろう。数回投稿したがなかなか掲載してもらえず、そんな簡単に掲載してもらえないのだと思うようになった。まあ確かに何のニュース性もない受信をレポートしていたのだから、それも当然なのだろう。

そこでもう少し特色のあるレポートを送ろうと、以降は自分の得意分野であるインドネシアに絞り、受信難易度の多少高い局をレポートした。そうしてやっと79年8月号を皮切りに、以降79年11月、80年1月の合計3回掲載してもらった。当時は投稿が採用されると掲載誌を送ってもらえることになっており、我が家にも掲載号が届いた。自分で買ったのとブッキングしてしまい、慌てて返品しに行ったこともあった。

80年1月が最後になっているのは、これ以降丁度高校受験の時期に入ってしまった（大して勉強もしなかったのだが）受信活動を自粛したためである。しかしその後高校に入学してラジオを聞く余裕がなくなり辞めてしまうとは・・・誠に残念であった。



RRI-Padang を5月12日の20:30~21:24に4092kHz、SINPO33-40~23421にて受信。内容は20:37まで音楽番組。そして20:59にID「……Radio Republik Indonesia Padang」。21:00よりJakarta中継となった。同局は時々入感するが、業務局の混雑のために状態は余りよくない。しかし相合Sは強いようである。また4000kHzにはRRI-Kemari が出ているので混雑には注意を要する。

(FRG-7、49mb)

【先日測定したところ、4000.7kHzに出ていました。余波ですが、同局は時々IDで「station Padang」とアナウンスするときがあるので、全く別の局(例えばTanjung Karang)と誤認してしまっても何とありません。】

自分の投稿が初めて掲載された短波誌

【BCL からのリタイア】

このように約5年間夢中になって楽しんできた趣味ではあったが、遂にそれをやめるときが来た。そんな日が来るとは思わなかったし、「えーい、やめた！」と宣言してやめた訳でもない。いわゆる自然消滅であった。

やめてしまった理由はいくつかある。ひとつはリグの限界。FRG-7で49mbでDX

をやるのは無理である。さりとてワンランク上のマシンを買うことは、高校に入学したばかりの自分には無理であった。それから時間的な制約。高校は通学に1時間以上かかり、勉強もスポーツも結構ハードな学校であったので、ラジオを聞いて遊んでいる場合ではないと思ったのである(実際にはラジオを聞かずとも、勉強などしなかったのだが)。最後にBCLブームの衰退である。1980年代に入ってBCLという趣味が勢いを失っていたことを、自分なりに感じたようである。もはやBCLなんてダサイと思ったのも一因であった。

そんな訳でなんとなくリグに電源を入れない日が増えて、いつしか全く聞かなくなり(ログを見ると思い出したように聞いていたようだが)、しばらく飛んで83年のKYOIの受信を最後に完全にBCLの世界から離れてしまったのであった。

復活後編

【復活】

まさか自分が BCL を復活するとは思っていなかった。そんな兆候もなかったし、周囲にも BCL は一人もいなかった。きっかけは Yahoo オークションであった。ネットオークションというものの存在を知り、試しに自分が売るものとしたら・・・という視点で FRG-7 や 5900 を検索したことに始まる。そのときに BCL をキーワードにサーチエンジンを検索し、BCL/DX 関係のサイトが結構あることを知り、非常な懐かしさを覚えた。そして興味半分でそれらのサイトを眺めているうちに、聞きたい欲望が蘇ってきたのである。

結局 FRG-7 も 5900 も使い物にならず、中古の NRD-535 を買って再開することになったのである。

【2台のリグ】

ここで復活後にメインで使用してきた 2 台のリグについて、その使用感を述べてみたい。私がかもっと沢山のリグの使用経験があればシビアな感想も出るかもしれないが、私の感想は極めて素人チックである。その分率直ではあるが。

NRD-535

最近の人気リグは何？と調べたところ、どうやら AOR の AR-7030 らしいということが分かり一度実物を見たいと思って、近所のハムショップを訪問した。そこで店主に受信機を見に来たことを告げると、出物があると言われて見せられたのが同店で委託販売されていた NRD-535 であった。JRC

の NRD というだけで、昔これらのシリーズに憧れた自分としてはすっかり舞い上がってしまった。505、515 の後継なんだから当然それ以上のものに違いない。そしてスペックも何も見ずに、ただアンテナにつないでもらって JJY がクリアに聞こえるのを確認しただけで即買ってしまった。7030 の新品の半額 (50,000 円) で買ってしまうのも魅力だった(結局後に 7030 も買ってしまったのであるが・・・)。



NRD-535

さてその使用感だが、少年時代の 2 台から余りにも進化しており、格段の違いを感じた。まずは 0.01KHz まで読み取れるデジタルカウンタに感激した。凄い！素晴らしいと思った。それから選択度は同様に素晴らしい。隣接周波数の混信はかなり切れる。但し音質は非常に悪い。とにかくこもる。したがって買った当初はその音に慣れずに ID が聞き取れなくて困ったものである。今ではかなり慣れたが・・・さらに使い込んでいくと、メモリが 200 チャンネルあり非常に便利である。メモリとかテンキー入力は昔のリグにはなかったものであり、これまた凄いものだと感心してしまった。私が買ったのはノーマルの 535 だが、Dバージョンというのもあり、そちらだと同期検波や

BWC(帯域連続可変)、そしてさらに狭帯域のフィルタもついている。DバージョンだともっとDXが稼げるのではないか… 幸いにもこれらの機能はユニットで提供されており、これらを差し込めばDバージョンに早変わりするのだ。もっとも既に製造中止になって久しい機種だったのでBWCオプションはメーカー在庫なしの状態だったが、運良く秋葉原で入手できた。

しかし投資した割には、余りリターンを実感できなかった。その2つがあったからといって、さほどDXに役立つとは思えなかった。そこで結局はいずれも売却してしまった。

よく言われる輻射ノイズの問題だが、今まであまり感じる事がなかった。しかしつい最近になって、ALA-1530 ループを分配してAR-7030と一緒に使用するようになって、初めて7030で嫌なノイズを感じた。これには参った。

とにかく2年半近く使用したが非常に使いやすかったし、成果も上がった。いかにも通信機といった感じの外観は大変気に入っていた。私は好きなリグである。

AR-7030

535の音の悪さに辟易して、音の良さに期待して購入したリグであった。使用感は正直言って抵抗があった。リモコンで操作するというのは非常に違和感があったし、なかなか使い方を覚えられなかった。

しかし慣れるとそのパフォーマンスは素晴らしい。特に中波帯の感度を落としていないというのが気に入って、中波帯は7030で、短波は535でという風に役割分担して使用している。コンパクトでペディション

やモバイルにも持って行きやすく、すっかりお気に入りになった。

NarrowにJRCの1.8kHzクリスタルフィルタを追加してあるが、TP受信のときはほとんどこれで聞く。しかし535のように籠ることもなく、了解度は非常に良好である。この他にNotchオプションも追加してあるが、こちらも耳障りなビートに効き目があり、なかなか重宝してる。



AR-7030

【9R-59Dに憧れて(後編)】

さて少年期で前編として触れたように、幻の名機9R-59Dには大変な憧れがあった。それだけにBCLを復活した3ヵ月後に、近所のリサイクルショップで9R59Dを発見したときにはたまらなく驚いた。実物を見るのは実は初めてであり、ある種の感動を覚えた。そしてこの場所でこんな形でめぐり合うとは何かの運命であり、自分に買えと天が命じているのだと勝手に解釈して(笑)、カードで衝動買いしてしまった。ただし本当に使い物になるのかどうかは分からないし、店員からも使えなかったら修理または返品して下さいと言われて家に持ち帰った。



シャックに君臨する 9R-59D。短い命だった。

シャックに設置すると、早速アンテナをつないで聞いてみた。すると・・・うーん、何か聞こえるのだが非常に弱い。ダイヤルの感触もかなりグラグラしていて危なっかしい。残念、これでは使えない。そう判断して店に電話し「修理は出来ないか？」と尋ねると、「古過ぎて修理できないので返品して下さい」ということになってしまった。

そんな訳で憧れたのに結局縁がなかった 9R-59D であった。まあもっとも今後に 59D を買う意味はないだろう。DX を本気でやろうと思うのであれば、最近のマシンにかなう筈がない。59D が持っていた優位性は、今となっては薄れてしまったのだから。それでもやはり 9R-59D は少年時代の憧れであり、機会があればシャックに置いて DX をしてみたいものだと思っていたりするのである。

【RAE を受信する】

BCL を復活して殆どすぐに思ったのは「RAE はどうなった？」ということであった。20 年前に 9690 で出ていたこの局の日本語放送は同波に掛かっていたジャミングのせいでまさに珍局。毎日ワッチするなどという地道なことのできなかった自分は、

一度も受信できぬままに終わった。

それから 20 年も経ったのだからいい加減によく聞こえるようになっただろう、いやしかしそもそも日本語放送はまだあるのだろうか？調べると周波数はさすがに 11710 に変わっていたが、依然として日本語放送は続いていた。しかし放送は月～金の 19～21 時にしか行われておらず、勤め人である自分にはなかなかトライするのが難しく、やっとのこと 2000 年末になってチャンスが巡ってきた。そしてダイヤルを合わせたところ・・・聞こえた！ついに幻と言われた同局を受信したのである。この頃は RAE の受信自体は昔のように難しいものではなくなっていた。相変わらずチャンネル選定が悪く北朝鮮に潰されて聞こえない日も多いが、昔に比べるとずっと受信しやすくなっていたのである。

それでもやはり感動だった。とにかくどんなアナウンサーがどんな内容を話しているのか、一度も聞いたことがなかつただけに早く聞きたかった。アナウンサーは有名な高木さん。氏の話すニュースは（後で知ったが）スペイン語の原稿をその場で日本語に訳して読んでいるとのことで、そのせいかとてもものんびりしていて、アルゼンチンらしい大らかな感じがした。そしてアルゼンチンと言えばタンゴ。トークの合間に流れるタンゴで、ああ、やっと RAE が受信できたんだなということを実感できた。



かつての珍局 RAE のペリ

憧れた RAE - 早速レポートを書いてペリを頂いて、改めて本当に受信できたんだなということを実感した。少年時代の夢をやっと実現できた喜びに浸った。

【T2FD 完成！】

BCL を復活しようとして、まずはほとんど衝動買いに近い形で NRD-535 を買い、すぐにアンテナを建てることを迫られた。20年前もそうだったが市販品を買うという発想はあまりなく、とりあえず自分でロングワイヤーを作って張ってみようと思い材料を買ってきて建てた。

しばらくは 4m 高と低く貧弱なパイプのマストと銅線で、最長 19m のロングワイヤーとして使用した。しかしながら周囲の DXer がレポートしているような DX 局が自分には受信できない。続けて購入した AN-1 よりもパフォーマンスが低かったので、程なく撤去してしまった。

AN-1 でもそこそこの局は聞こえた。しかしノイズが結構あり、また受信した信号自体も混変調気味でビートが多くあまり聞きやすいとは言えなかった。そこで更なる DX を目指して、短波帯のアンテナとして書籍に「RF システムズー押し」と紹介されていた「T2FD」を購入し設置することにした。

幸いにも我が家は一軒家であり、決して広くは無いが一応敷地はあるからである。

ワイヤーアンテナのくせに 3 万円もする T2FD は近所のハムショップを経由して入手した。さあ張ってみようと思い梱包を解くがこれが大変。T2FD は丁度縄梯子のような形をしているのだが、これが複雑に絡み合っていて大変なことになっている。これをほどくのに一苦労する。

そしてその一方を 3F 壁面のマストにくくりつけ、もう一方を庭のフェンスにくくりつける。全長 15m で計算上は丁度いいはずだったのだが、実際に設置してみると屋根に乗かってしまいダラーンとしており何ともだらしなない感じ。みっともないながらもとりあえずアンテナチェンジャーにつなぎ、同じ局を AN-1 と比較しながら聞いてみる。

その結果は・・・やはり S メータの振れは AN-1 の方が勢いがいいので、一瞬失敗したか！と思った。しかしほどなく書籍のレポートの通りで、T2FD は一見静かに見えるが実は微弱な電波を確実に捉える非常に優秀なアンテナであることがわかった。こうなってくると現金なもので、だらしなく設置されている T2FD をきちんとすればもっともっとパフォーマンスを発揮できるのではないかと考えるようになった。

まずはフェンスにくくりつけてある方をきちんとマストを建ててそこにくくりつけ高さを稼ごう。一方が高くなると距離を稼ぐためにもう一方は今よりも高くし遠くに設置しなければならない・・・マストには何を使おうか、タワーを建てるしかないのか・・・いろいろ悩んでたどり着いた結論は結局原点に戻る事だった。すなわち 20 年

前と同じようにマストに「竹」を使うことである。

竹はワイヤー系アンテナのマストの素材としてはやはり最高である。

- ・ まず1本の長さが10m前後ある。他の素材でジョイントせずにこれだけ長さが稼げるものは無い。
- ・ そして軽い。竹なら万が一倒れても大きな被害を及ぼすことは考えられない。
- ・ 最後に安い。一本当たり市価で2,000円くらいと思われ、格安である。

これほどまでにメリットの大きい竹を最後まで使わなかったのは、やはり見栄えの問題である。20年前も決して見栄えは気に入らなかったが、とても簡便なので使ったのだが今回はうちはまだ新築2年目である。しかし上記のメリットには替え難く、竹を使うことを決断した。

さてその竹を入手するに当たっては近所の竹林所有者に頼んで、自分の最も気に入った竹を自分で切らせてもらいに行った。しかし「できるだけ長く、できるだけ丈夫で」と欲張ったため、1本はとんでもなく重くなってしまった。しかも公道をかついで歩くので車にも注意を払わねばならない。

やっとの思いで自宅に持ち帰り約8mの高さにして建てた。そしてもう一方はパイプマストを復活させ3Fベランダに建てた。高さは恐らく13mくらいになったと思う。かなり良くなつたのだがまだ屋根に乗ってしまっている。これが完全に宙に浮いて完成形と言えるだろう。その後もう一本竹を頂きに行き、一応完成を見ることになった。

購入してから設置までやたらに時間がかかってしまった。思いの他障害が多かった

からである。それを乗り越えるために大変な苦勞をした。でもT2FDはその苦勞に見合うだけのリターンを私に与えてくれたように思う。

【ミーティングへの参加】

復活早々に情報取得のため、日本BCL連盟に再加入した。そして一番やりたかったのはミーティングに参加することであった。2001年1月は別件で出席できなかったのも、その次の3月に、実に久しぶりに町田ミーティングに出席することになった。どんな人が来て、どんな内容になるのだろうか・・・

大いなる期待感を持って出席したその回は全員で14名ほどの参加者がいて、こんなに大勢来るのかと正直驚いた。内容的にはそれぞれの興味関心の内容が多岐に及んでおり、なかなか難しいなと感じた。私の関心事は、ある人にとっては全く関心のないことであり、その逆もあるからである。それでもリアルな人間とBCLの話ができるのがたまらなく嬉しく、その後数回出かけて行くことになった。その後町田だけではなく、よりDXに特化したミーティングらしい関東DXersサークル(KDXC)まで出かけて行くことになった。

確かにミーティングはいろいろな方と実際にお会いできて、その方自身をしっかり理解するいい機会になる。日頃自分が疑問に思っていることを直接尋ねることもできるし、ノウハウを学ぶ機会でもある。にもかかわらず5,6回も出席すると、だんだん出席するのが億劫になっていってしまった。

この理由はいくつかあるが、ひとつはDX情報であれば既にネットで交換されてしまっており、ミーティングに行っても新たに得

る情報は少なかったからである。ふたつ目は前述した興味関心事の多様性である。それぞれ異なるので必ずしも話題が合うとは限らず、寂しい思いをすることもあったからである。3つ目は時間的な制約であろうか。ミーティングに出て行くとなると、特に都内に行くとなるとまさに半日ばかりである。ネットという自宅にいながらにして使える手段に慣れてしまうと、よほどの恩恵がない限りはそれだけの時間を掛ける気がしなくなる。そんな感じで、正直ミーティングというものを楽しめなくなっている自分に気付くのであった。

しかしネットは決して万能ではない。人は飲みながら話したり、BCL 談義で盛り上がったたり、ディープな付き合いもしたくなるのである。ミーティングにおいて学んだことも非常に多い。従ってオンラインとオフラインの適切な組み合わせが必要になってくるのである。

【日本 B C L 連盟を訪ねる】

復活後ぜひとも実現したいと思ったのは日本 BCL 連盟のオフィスを訪問し、昔の懐かしい資料を閲覧することであった。自分の最大の後悔は過去自分が集めた「短波」「Hz」そして「DX 年鑑 1980」などの書籍を全て捨ててしまったことである。今となってはオークションでの出品を待つ以外に入手する術は無い。特に自分が投稿してそれが採用され掲載された分の雑誌すらないこと。せめてコピーだけでも側に置きたいと思い、意を決してして訪問した。

果たしてそこは自分が考えていた以上に小さなオフィスであった。最初から小さいだろうなと思ってはいたがここまで小さい

とは・・・しかし自分が欲しいと思っていた資料は全てあり、それらをコピーした。懐かしい、涙が出そうな 20 年振りの再会であった。自分のレポートも全て見つかったし、5900 や FRG-7 の技術資料も全て入手することができた。中学時代に帰って夢中になって資料を探した、何とも言えない幸せな時間であった。

最後に一人だけオフィス内で仕事をしている年配の男性と言葉を交わす。ブーム衰退後の BCL 界の寂しい状況について話を振ると、ブーム当時の話をいろいろしてくれる。「短波は実発行部数が 10 万部以上あった」とか「グアムの BCL 教室は赤字だった」とか「今は 40 代の会員が一番多い」等々。帰り際にお礼を言い遅ればせながら自分の名前を名乗ると名乗り返してくれたが、思った通りその男性こそ会長さんその人だった。

【FRG-7 復活！】

かつて自分が中学生のとき（'78 12/31）に親に買ってもらい、高校入学後 QRT するまで愛用した往年の名機 YAESU FRG-7 は昨年末の 20 年振りの復活の段階では残念ながら故障していた。それはそうだ。電源も入れずに 20 年間も押入れの中に放っておけば、受信機だっておかしくなってしまうだろう。電源は入るのだがボリュームにガリが発生している。また D バンド(11MHz 以上)はほとんど聞こえなくなっていた。そしてしばらくして再度電源を入れたときには、今度は通電しているという感触さえなくなってしまった。

記憶が定かではないがもちろん自分でももらった小遣いは貯めて、その上で足りな

い分を親に補填してもらってやっと買ったマシンである（確か売価¥44,800 であったと思う）。今でこそサラリーでそれほど苦もなく買ってしまう金額だが、当時のその金額は大金である。まああまり物をねだったりしない私がどうしても欲しいと言っていたので、無理をしてでも買ってやろうと思ったのだと思う。自分の青春の思い出とそんな親の気持ちを思うと、売ったりとか捨てたりすることは考えられず、高くつくことはわかっているのだがそれでも修理して復活させようと思ったのである。

最初は定石通りメーカーであるパーテックスタンダード社に問い合わせた。しかしながら古いことを理由に部品が無いかもしれない、高くつく（2~3万円）かもしれない、仮に修理できても昔ほどのパフォーマンスが出ないかもしれないと返答が帰ってきた。どうしたものかと考えあぐねていたときに目にしたのが、やはりインターネット。昔のBCLラジオを展示しているサイトがあり、よく読んでいくと「BCLラジオの修理引き受けます」とある。見れば相当数の修理をこなしているようであり、種類も実に多様で、この人ならFRG-7を復活させてくれるのではないかという予感がした。

とは言え商売でやっているのではなくあくまでも趣味の延長として善意でやっているという感が強く、「フィーリングが合わなかったらどうしよう」とか「やたら高かったらどうしよう」とかという一抹の不安もあった。でもとりあえず相談してみようとメールで問い合わせしてみた。その中で前述のような自分の思い入れを書いて、是非面倒を見て欲しいと切に訴えかけた。

返事はすぐもらえて「いいものを持っていますね」とあり気持ちはそれなりに通じたのではないかと思ったが「じゃあ引き受けましょう」とも書いておらず、様子を見られているのかなという気がした。そして3回ぐらいメールをやり取りして、「ではとりあえず挑戦してみましよう」と言ってもらえた。しかしながら本当に直るのか、またいくらかかるのかはこの段階ではわからない。しかも着手できるのは仕事の関係で1ヵ月後とのこと。いずれにしても待つしか方法は無い。

そしてやっとその時期が来て、丁寧に梱包して一応礼儀と思って電話で一言挨拶をする。年配とは思ったが声はそれほど老けてはおらず、普通のおじさんといった感じで飄々と応じてくれる。発送する際に念のためと思いFRG-7の取説と回路図、そして改造個所であるNarrow Filterの改造記事を同封する。ただ「改造してます」と書き加えるのを忘れてしまったので、メールでその旨伝える。それに対し同氏より返信があり改造についてはあまり感心しない様子。しかし箱が大きく置き場も無いので、一両日中に目処をつけて返送するとのこと。そしてその日の午後には「発送しました」との連絡。早い！感度もICF5900より良い（何故ICF5900との比較なのか？）と書き添えてある。

楽しみにして翌日自宅へ帰って、真っ先にFRG-7に駆け寄る。すぐにセッティングしいざ電源をONにする。すると・・・復活した！間違いなく復活した。DX局がしっかり聞こえる。NRD-535とあまり変わらない強度でRRI各局（Jambi、Ternate、Pontianakなど）が入感する。Narrow

Filter の切れ味も相変わらず良い。確かに FRG-7 は元気になったのである。

一抹の不安があった（もちろん予算を超えるようであったら取りやめをすと言っていたが）代金の方も無事予算内に収めてくれた。こうして自分の宝物は完全に蘇ったのである。聞けば FRG-7 は米国でも極めてビンテージ度の高いレシーバーであると評価されているとのことである。単なる飾りでなく実用上も非常に能力は高いと思う。せっかく復活したのだからこれからは大事に使い、これからも続く BCL ライフの中で役立てていきたいと思う。

上記修理に際してお世話になったラジオ工房（内尾悟）さんのサイトは <http://www31.ocn.ne.jp/~radiokobo/> です。FRG-7 の修理については <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/1130/other/frg-7.html> に掲載頂いています。修理が終わった後に見学にお邪魔しましたが、懐かしいラジオが山のように積んでありまさに宝の山！といった感じでとても楽しい空間でした。

【アンテナについて】

アンテナに関してはわずか 3 年の間に随分いろいろやったので、ここに総括してみたい。実は 535 を買った際に店主に ALA-1530 の紹介を受けたのである。時代が変わったとは言え、いきなりループアンテナの紹介を受けるのは、何とも奇異な感じがした。そもそもループアンテナって中波用のアンテナでしょ、自分の聞きたいのは短波だし・・・ 値段が結構するのも興味が引かなかった一因である。しかしこちらも巡り巡って購入してしまう訳だが・・・

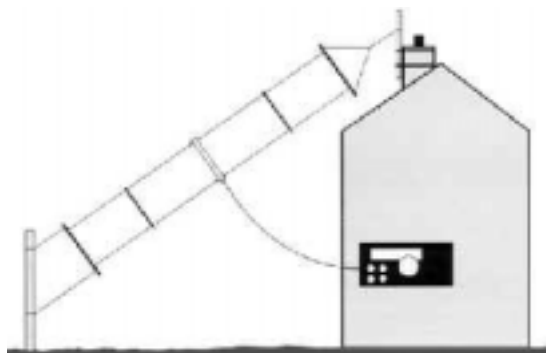
まずは前述の通り簡単なワイヤーを張ったのだが、思ったほど DX 局が聞こえない。何故だ？ととにかくノイズが多いのである。「ガーッ」と激しい音で出ており、微弱な信号などが消されてしまっているのである。この傾向は特にワイヤーの後に購入した SONY AN-1 では顕著であった。後に判明したが、この激しいノイズは ISDN の TA から発せられていたものだったのだ。このことに気付いたのはある DXer 氏のサイトを拝見し、TA が重大なノイズ源になることを知り、TA の電源を切った際にノイズがスッと消えた瞬間であった。アクティブアンテナ AN-1 はフィーダーでノイズを拾い、さらにアンプで増幅させ、最悪の状態にしてくれてしまっていたのだ。実際その後 RF Systems のパッシブアンテナ T2FD を太い同軸ケーブルでフィードすると、確かに ISDN ノイズは残るが、その程度は大幅に減少したのである。

そんな感じで試行錯誤を繰り返しながら浦島太郎的状况を少しずつ脱し、徐々に昔のような DX の勘を取り戻していったのである。最初のワイヤーアンテナは AN-1 と比較してイマイチと判断して間もなく撤去してしまったので、その真価は実はよく分



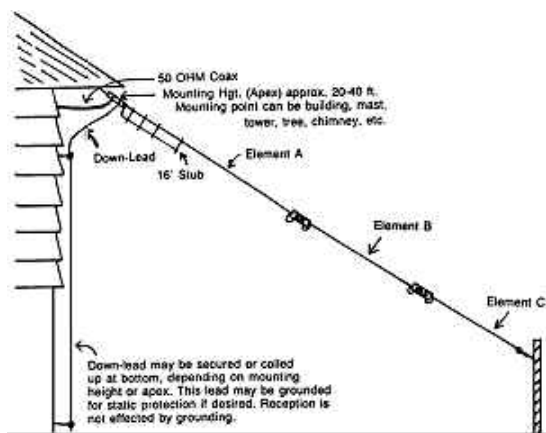
アクティブアンテナのベストセラー SONY AN-1 からない。S メータの振れが AN-1 の方が

大きかったということがイマイチとした理由なのだが、S/N 比で考えるとどうであったかというところは不明である。そして AN-1 は前述のように T2FD に完敗し、同様に短期間でメインアンテナの座を滑落することになるのである。



RF-Systems T2FD

T2FD のすぐ後にワイヤー系アンテナ 3 本体制にした時期があった。米 Universal より Alphadelta の DX SWL Sloper と RF Systems の EMF を輸入し、それぞれ方角を変えて張り比較してみたのである。残念ながら EMF はパフォーマンス悪く失格。DX SWL Sloper は悪くはなかったのだが T2FD に比べるとイマイチというのがあり、結局この 2 本は日をおかずして撤去することになってしまった。



Alphadelta DX SWL Sloper



RF-Systems EMF

そしてその後、いろいろなサイトで紹介されていた ALA-1530 に戻ってくる。「ローノイズ、混変調に強いがローゲイン」という評価が多いように思われ 2 の足を踏みつづけたが、某 DXer 氏によるレビューが非常に魅力的であったので、ついに購入に踏み切ったのであった。



Wellbrook Communications

ALA-1530

そして使ってみてその優秀さを実体験として認めるに至った。これまで愛用してき

た T2FD と比べても遜色なく（得手不得手はある）中波から短波にかけて（実は VHF まで）広いレンジで高いパフォーマンスを発揮した。そこでしばらく T2FD との 2 台体制が続いた。

しかしアンテナに対する欲望はとどまるどころがない。もっといいものがあるのではないかと、貪欲に捜し求めるのである。そうして行き着いたところは同調型のシールドループであった。シールドゆえにノイズに強く、また同調型ゆえに混変調に強いという 2 つのメリットがあったからである。

これについてはこの方面の権威の方のお宅にお邪魔して、実地でご指導頂く機会に恵まれた。そしてまずは中波用を完成させることができた。このままでももちろん使えてサイパン、グアム等の局が聞こえたが、ゲインは少々不足している。そこでコントローラー部にプリアンプを追加したが、それでも ALA-1530 には及ばない。これはアンプの増幅率の差である。そこで最後には中波専用の同調型プリアンプを作成し追加した。これをもってやっと ALA に追いつき、TP 局も同程度で受信することができた。同調型でゲインもコントロールできるので混変調に対しては ALA に比べて強みがあるが、ノイズに関しては ALA 自体ローノイズなのでここでは余り差を感じない。それにしても自作のアンテナが、既製品の高価なアンテナに追いついたという意義は非常に大きいのではないかと考えている。



同調型微小ループアンテナの内部

そして 2003 年春に自作して大ホームランとなったのは、K9AY ループである。単一指向性で優れたパフォーマンスを発揮すると聞いていたのでずっと憧れていたのだが、S 氏が製作レポートを公開して下さったので、満を持しての製作及び使用開始となった。製作は極めて簡単、部品数も少なくあっという間にできてしまった。ただしこのアンテナは周囲長が 30m（もう少し小さくも作れるようだが）あるので、自宅で使用するのは難しく、近隣の河川敷で使用実験した。

そのパフォーマンスは実に素晴らしく、もちろんコンディションやロケーションも良かったのだが、南北方向に張って南方面が非常に良好に受信できた。私の中波 DX の経験などまだ大変乏しいのだが、アジア・パシフィック方面をこれだけ良好に受信したのは初めての体験であった。オーストラリア、グアム、サイパン、ソロモン、フィリピン、マレーシア、インドネシアといった国々の局が強力に入感した。

何と言っても指向性の鋭さが素晴らしく、例えば 702KHz に出ている北朝鮮局は指向性を切り替えた瞬間に駆逐され、オーストラリアの ABC-2BL が強力に浮かび上がっ

てくるという状態である。これには大変驚きかつ喜んだが、反面自宅で聞くのが嫌になってしまうのではないかという危惧の念もあるが…



指向性に優れる K9AY

このようにわずか 3 年の間にいろいろ実験をしてきたし、電波の入口として更に高いものを目指すことになっていくであろう。興味の尽きないエリアである。

【個人輸入】

一昔前であれば考えられないことであったが、インターネット時代の今は個人輸入もいとも簡単に行えるようになった。今回アンテナを輸入して、それを痛感した。

BCL ブームの去った日本ではこれまで、リグ以外の BCL 用品はほとんど皆無であり、入手するにはハム用のものを流用するか若しくは国内代理店が輸入する外国製品を購入するしか手はなかった。海外では現在も BCL 用品が生産され販売されている。そしてそれらは国内にいて通信販売で購入することができる。

ただし個人輸入するにしても今まではやり取りは基本的に郵便で、手間とお金と時間をかけて行われていた。まずはカタログを取り寄せるために郵便局へ行って IRC を

買って同封して航空便を送り、それに対し販売店は郵送する。それを見て欲しいものを決定し、郵便局へ行って為替を作って書留で代金を送る。その後しばらく待って商品が送られてくるという大変な労力であった。もちろん全て英語でやり取りせねばならないし、そういう仕組みを理解すること自体が苦勞であった。

ところがインターネットの出現が、それら全てを一変してしまった。まずカタログを取り寄せる必要はなく、全て web サイトで閲覧することができる。そしてそれをメールで発注できるのだ。決済はクレジットカードで OK。カード No.を記入し、またカードをスキャンしてメールに添付して送れば良いのである。これら全て自宅に居ながらにして行える（カードのスキャンのみ会社でやってもらったが）、そして在庫さえあれば比較的早く商品が送られてくるのである。



Universal Radio の商品カタログ

前項のアンテナ 2 本はこの方法で米国 Universal より輸入したが、為替レートがイマイチだったとは言え比較的リーズナブルな価格で購入できたのではないかと思います。何よりも楽しかった。これからもちょくちょく個人輸入を利用し、国内では買えないいろいろなものを買おうと思っています。

【ALA-1530 顛末記】

さて先に触れた ALA-1530 についてもう少し記述してみたい。ALA-1530 は英国 Wellbrook Communications 社が製造、販売している長波～中波～短波用のループアンテナである。私が BCL を復活して受信機の実機を見に近所のハムショップに行くと中古の NRD-535 を購入した際に、店主に「アンテナもどうですか」と奨められたのがこれだった。

その後何人かの DXer のサイトでこのアンテナをレビューしているページを見かけたが、その評価としては「ノイズと混変調に強いがゲインは今ひとつ」というところに集約されるように感じた。従って引き続き 1530 に対する興味は湧かず、依然としてワイヤー系で優秀なアンテナを捜し求めた。

さて DX を続けていく中で改めてアンテナの重要性を意識することになるが、特に感じたのは「ゲインよりも S/N 比だ」ということであった。特に日本のように狭くて人工ノイズの多い国ではその重要性は際立つのではないかと感じ始めていた。そんなときに私のサイトにメールを下された DXer の方が、私のアンテナに対する興味が強いことを知り 1530 に関するご自身のレビューを送って下さった。それによるとこ

のアンテナは極めて優秀であり、ハイゲインのバーチカルアンテナより受信できる局が増えたという結果が報告されていた。ここに至りさすがに私もこのアンテナに対して魅力を感じずにはいられなくなった。そこでついにこのアンテナを導入することを決心した訳である。

発注に際しては例のごとく個人輸入の楽しさを知ってしまったので、英国の本社に直接発注することにした。方法としてはメールにて最新の価格と送料を照会し、次に郵便局より為替にて同社に送金した（身分証明が必要になるので注意！）。先ほどのレビューによれば代金を受領した時と商品発送時にはそれぞれメールで連絡があったと書いてあったのでそれを待っていたが、3 週間近くたってもなしのつぶてであったので少々焦り、メールにて問い合わせをする。すると翌日に返信があり「代金は受け取っており商品も昨日発送した」とのこと（おいしい、皆と同じように対応しろっつーの）。

さて言葉通りにアンテナは発注後 3 週間で我が家に届いた。そして早速受信機につなごうとするが・・・ここからが苦勞の始まりだった。実際に使用に供するための準備作業が多過ぎて、不親切この上ない製品なのである。不親切は以下の 3 つの点である。

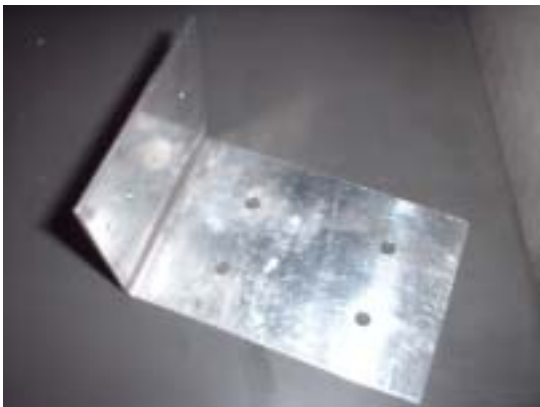
アンテナ～コントロールボックスをつなぐ同軸ケーブルのコネクターが何と BNC であり、ユーザーは自分で同軸ケーブルを加工して準備しなければならない。コントロールボックス～リグ間も BNC のため、リグとの接続には変換プラグが必要となる。



ALA-1530のコントロールボックス

コントロールボックスには DC12V の安定化電源が必要となるが、付属品にはコントロールボックスに差し込む「プラグ」しか付いておらず、これまた加工が必要である。

極めつけは取付金具である。「こういったものをこういう寸法で作れ」という指示は書いてあるだけで、これまた準備しなければならない。しかもそんな金具はいくつかの DIY ショップ、金物店を回ったがどこにも売っていないのである。



折り曲げは某氏の支援を仰いだ自作取付金具

は何とかなったが早速 でつまづいた。自分でコードを作って安定化電源から電源を取ったが、何故か電気が流れない(工作ミスでショートしていたようである)。従ってアンテナは作動せず、同軸なのか電源な

のか原因の切り分けから頭を悩ませねばならなかった。そこで前出の DXer 氏や他のユーザー氏にも救いの手を求めてアドバイスを請う羽目に陥った。そして電源について、AC アダプタでも問題無いようであると聞き、7030 のアダプタを(こいつも英国製!) 試しにつないだところ・・・ピンゴ-! であった。見事にアンテナは作動し、受信機からはさまざまな局が聞こえ始めた。そこで早速秋葉原に行ってジャンクショップで規格に合う AC アダプターを見繕い購入した。

仮設置だったがまずまずパフォーマンスは良いようである。よしっ、と次にはこいつをきちんと設置するべく準備を始める。しかし取付金具が無いのである。いろいろ考えた末たどり着いたのは、既製の金具を諦めオリジナルの物を作ることにしたこと。しかし自分で作るには道具も無く無理なので、近所のホームセンターの工作室に加工を依頼することにした。2mm 厚のアルミ板に自分でけがきをして作ってもらおうと考えた。切断と穴あけまでは自分で出来たが、折り曲げる工具がなく困ったが、某氏の支援を仰いで幸いにも完成することが出来た。

ここまでの諸経費は(同軸ケーブルは仕方ないとして)変換プラグ 1,400 円、AC アダプター 500 円、取り付け金具 2,360 円(ループ上部固定のためのデベマウント 1,400 円、アルミ板 960 円)の計 4,260 円。経費はともかく要した時間と労力はばかにならず、こんなもの最初からつけて置けよ! とかなり腹立たしくなった。

そしてやっとの思いで自宅にマウントし改めてパフォーマンスを見ると・・・よし

っ！苦労した甲斐があった。非常に素晴らしいパフォーマンスである。

苦労を掛けた子ほど可愛いと言うが、手を焼かせただけにこのアンテナに対する思いは結構強くなった気がする（メーカーに対しては未だに怒りが解けないが・・・）。

ちなみに国内のショップで代理店経由で購入すると価格は若干高くなるが、また別料金だが AC アダプタも取付金具も購入できるようである。面倒を厭う方は絶対にそちらをお奨めする次第である。

【ハムフェアに参加する】

2001年8月に、初めてハムフェアというものに参加した。会場はこの年はパシフィコ横浜であった。なかなか大きなイベントであるし BCL も数多く参加するようなので、一度は見てみたかったのだ。

実際会場に入ると大変驚いた。いやー、凄い。何という規模だ。まるで秋葉原のような、いや、無線関係がこれだけ集まっているのだから、秋葉原以上のワンダーランドである。

嬉しくて嬉しくて目を輝かせて歩き回ったが、この年は JSWC のブースで PWR のナックナンバーを 10 年分とアドカラーのログノートを大量に購入した。そしてまた来年も必ず来ようと、心に固く誓ったのである。

2002 年は会場が東京ビッグサイトに変更になった。そして日数も 3 日間から 2 日間に減少した。ここ数年これで中止かと言われ続けているとのことであったので、存続しているだけマシとも言えたが、しかしこのときは残念ながら楽しいとも思えなくなってしまった。いくつかのブースはただ

のパソコンジャンクのみであったりアニメであったりと、「おいおい、何処がハムフェアだよ」と言いたくなるようなものも相当数見受けられたからである。そこに入場料を支払って参加するのは少々抵抗がある。そもそもハムフェア最大の楽しみは珍しいものを物色するところにあると思うが、ここでもインターネットの影が見えるのだが、買い物はネットオークションで完結してしまうのである。この辺りにもハムフェアの存在意義が薄れてきた遠因が求められるのではないだろうか。



多くの人出で賑わうハムフェア（JARLHP より）

2003 年は遂に参加しなかった。行ってみたい気持ちもなくはなかったが、どうしても行こうという気にもならなかった。今後はコンセプトを変えないと存続は難しいのではないかと思うが、人々がリアルに集う場として続いて行って欲しいと思うのが本音ではある。

【記念の受信テープと MD】

20 年前から初受信の際は必ず記録としてテープに残すようにしていた。基本的には受信した局の ID 確認の意味もこめて、ID の出るシーンが必ず含まれるくらいの時間（平均 1 分半くらいだろうか）録音するようにしていたのである。テープの本数は 60

分テープ5本くらいでそれほど多くない。

しかしながらカセットテープには下記のようないくつかの欠点がある。

- ・ CDのようにランダムアクセスすることができない
- ・ 編集するにはダビングという方法をとるが、この際に音質の劣化が発生する
- ・ カセットテープは伸びたり切れたりといった経年劣化が発生する

幸いにも今のところ無事に残っているが、テープは劣化するものであるし早めにデジタル化して保存しておくべきだろうと考えた。そもそも BCL に録音機器は必需品であり、復活して間もなく何を導入しようか検討に入った。

当初は CD-R を検討していた。音質の劣化が全く無い（MD は若干間引く）からである。しかしながら少し考えてこの考えは非現実的であることに気付いた。一旦録音したカセットテープを丸ごとダビングするのであればいざ知らず、受信の都度録音したり消したりするには全く使えない。

そんな時 Grove 社の Monitoring Times に DX Lifesaver というタイトルで受信音録音機器としての MD の活用事例が紹介されていたのを見た。それによれば録音したデータの編集の自由度が非常に高い（簡単に消去できてしかも消去した部分に隙間ができない、録音したものの分離・結合ができる、録音したものの順序が変えられるなど）カセットテープの時代から見ればまさに画期的な製品であることに気付いた。

そこで MD の導入を決断したが、問題となったのは機器の価格である。カセットや CD は低価格化が進んで簡単に買えるようになったが、MD は未だ4万円近くする高

級品である。復活後 BCL に急速に投資した身としては、更にそんな投資はできない。どうしよう・・・そんな悩みを解消したのは近所のリサイクルショップであった。確かに新品で最新型の MD はまだ高価なのだが、発売して数年経った機種はデザインの的には今一だが性能的には別段問題なく、しかも価格はかなり手頃になっていた。それこそ1万円前後から売られていたが、その中でまあまあ程度の良さそうなものを14,500円で購入した。



SONY MZ-R50

さて買ってきて早速使ってその録音を何回か聞いてみると、妙なことに気付いた。どの受信音にも「シャーッ、シャーッ」と周期的なノイズが入っているのである。そしてそのノイズは明らかに MD での録音開始と同時に始まっていた。「何だこれは。不良品か!」。がっかりしたがその旨をリサイクルショップの店主に伝えたところ、同じ機種でもう少し程度のよい物（23,000円で売られていた。適当な価格設定である）に替えてくれた。

そして今一度帰ってから録音に使用してみたが・・・あー、やはり同様のノイズがある。「これは MD 特有のノイズなのか」と諦めかけたが、しばらくして気が付いてみると

そのノイズは入らなくなっている。あれは一体何だったのだろうか？

とりあえずDX局受信時のID確認の際に、またレポートを書くための番組録音の際に大活躍している。

(追記：今でも時々MD特有のデジタルノイズが発生することがあるが、そんなときはAC電源をはずし内蔵充電機で稼働させると発生しなくなる。最近気付いた。)

ところで例のテープのバックアップの件であるが、BCL関連の記録は全て保管してあったのでIndexはほぼ完璧に作る事ができた。ダビングの途中で使っていたテープがディスカウントストアのオリジナルテープだったせいだろうか、編集の途中で全て切れてしまいセロテープでつなぎ合わせてやっとの思いで編集を終えた。大事な思い出を失わずに済んで本当に良かった。

【記録を残す】

受信テープと同様に今や自分にとって宝物なのは、過去つけていたBCLのログや随想等の記録である。その昔は大学ノートを使って「今後どこを狙うか」とか「My Shackリニューアル計画」とか「BCLの夢」などを書き付けていたのだが、上記の受信テープのIndex作成でもこれを保管していたことが大きくものを言った。これが無かったら受信テープを聞いてもそれがどこの局であるのか判別できないケースが多かったであろう。BCL連盟でスムーズに資料が探せたのもこれらランダムに記録された情報があったからこそである。

今は必ずしも紙媒体で残すのではなく、パソコンのハードディスクの中にデジタルデータとして残すようにしている。これな

ら編集も容易だし、色褪せることも無い。ただHDDはクラッシュする恐れもあるので、時々CD-RWにバックアップしてやる必要はあると思うが。

それにしてもそれらの記録の中で書かれている「理想のリグ」と題して自分の夢を書き綴ったページを読み返すと、中古とは言え今使っている535のスペックは理想のリグをはるかに凌ぐ素晴らしいマシンであると改めて感じるし、それを自分のものとして使える喜びを改めて感じざるを得ないのである。

【受信機のコレクション】

さて復活後NRD-535とAR-7030を購入しDX的には万全の態勢ができたはずだったが、その後にまたリグが増殖していくという現象が発生した。と書くと他律的で自分に責任がないように聞こえるが、何のことはない、自分で好き好んで増やしたのだから自分の責任である(笑)。もう買わないと思いつつ、欲望の炎を消しきれなかったのである。そもそも沢山台数があっても、人間は同時に何台ものラジオを聞くことは出来ないのだから。従って昔からあるリグ(ICF-5900、FRG-7)及び特別な用途を持ったリグ(ワイドバンド:MVT-7100、旅行用:ICF-2010)以外は実際には「観賞用」という意味合いに他ならない。そんな訳でここでは新たに購入してしまったリグについて少し記してみたい。

観賞用リグは5台であるが、これらが選ばれた理由は「昔の憧れの度合いが高かったこと」である。最初に憧れたのはクーガー-2200と115、そしてスカイセンサー5900。どれか1台しか買えない訳なのでスカイセ

ンサーを選ばざるを得なかったのだが、他の2台とも持てるものなら所有したかった。幸い給料をもらっている今なら、飲みに行くのを数回我慢すれば中古品は買えてしまう。そこでまずこの2台は目出度く入手することが出来た。



5900のライバルだったクーガー-2200



シルバーボディが美しいクーガー-115

もう1台欲しかったのはプロシード 2800である。実はプロシードこそ私が最も憧れた機種だったのかもしれないと、最近思うようになった。それはプロシードがデジタル周波数カウンタを搭載した最初のBCLラジオであり、BCLブームの真っ只中に発売されて広告宣伝も鮮烈な印象を残したからではないかと思う。



「赤いデジタル」プロシード 2800

広告宣伝とはラジオCMで散々流れた「周波数の語呂合わせ」。「いいな向こうの生ビール(11765kHz DW)」とか「響くゴンゴンビッグベン(11955kHz BBC)」とかは今でも耳の奥底に記憶として残っている。また毎月買っていた「短波」の裏表紙にも毎月広告が掲載されていて、そこにも各局の周波数のデジタル表示とその語呂合わせが沢山載っていた。1kHz単位で周波数が赤いデジタルカウンタで表示される……。デジタルカウンタのついたリグなんてFR-101DDくらいしか知らなかった自分としては、それが自分の手の届く可能性のある価格帯であったことに、現実的な夢を感じたのである。そう、「赤いデジタル周波数カウンタ」は、私のBCLへの憧れそのものだったのかも知れない。

しかし残念ながらBCLラジオとしては画期的かもしれないが、本格的なDXを志向するとプロシードはスカイセンサー後の1台として選ぶ訳には行かなかった。90mbが受信できる点を除いては、スカイセンサーとの根本的な違いはない。所詮はBCLラジオである。だから次のリグにはFRG-7が選ばれたのである。そんな憧れからプロシードも飲みに行くのをもう数回我慢して

(笑) 手に入れることになった。

そして ICF-6800A だが、これは完全に衝動買いである。本当はプロシードがあれば、「デジタル周波数カウンタ搭載のリグを所有するという」欲望は叶えられた筈である。



ICF-6800A

しかしプロシードの入手に手間取っているうちに、たまたま知人から 6800A 放出の話が舞い込んだのである。6800 に対する憧れももちろんあった。「短波」で連載されていた漫画「リグ・ログ・ラグ」の登場人物も「ロッパチ」と呼んでメインに据えていたのを覚えている。とは言え当時の自分はこのリグを買う気は全くなかった。それはもう既に自分が FRG-7 を持っていたということと、やはり本格的な DX をやるのであれば通信機メーカーの機種しかない決めていたためではないかと思う。実際に自分が BCL をリタイアする直前の 79 年には手の届く可能性のある通信型受信機として TRIO の R-1000、80 年には YAESU の FRG-7700 が発売されたが、6800 は機種選定に当たって自分が最も重視した選択度と多信号特性が、これらの機種にかなわなかったからである。実際にカタログスペックもそうであるし、ダイナミックレンジに関する雑誌の評価も他の 2 機種の方が高く、

6800 はリスニング派向け、他の 2 台は DX 向けという風に色分けされていた。要はヘビーな DX を志向する自分としては、他の 2 機種の方が魅力的に映ったということである。

実際には 80 年に BCL 活動を停止してしまったため、次のリグを選ぶという行為はなされず、R-1000 も FRG-7700 も ICF-6800 も購入しなかった訳であるが、自分の BCL 末期に出現した高級 BCL ラジオとして 6800 は記憶されており、当時では絶対買えなかったであろうラジオを自分の手元に置くことができる喜びで、「多少難あり、だから安く。」というお友達価格で譲って頂いたのである。

観賞用は以上 4 台で終わる筈だったのに 2002 年 9 月に加わったのが TRY-X2000 である。そう言えば 5900 を選ぶ時に何故この機種とも悩まなかったのか不思議である。周波数直読もできるし、何といても 1.6 ~ 30MHz のフルカバーである。5900 も 2200 もカバーしていない 90mb が聞けるのである。思うに 5900 を購入した頃はまだローバンドに目覚めていなかったこと、またライバル機の 5900 と 2200 の評価があまりにも高かったせいであろう。いずれにしても思い出のある機種なので、手に入れることにした。



東芝 TRY-X2000

最後に ICF-2010 について触れておきたい。「ポータブル不朽の名機」という評価と 85 年発売機種が今でも新品で購入できるというノスタルジーとで、是非とも手に入れたいと考えた。日本では入手不可で米国であれば入手可能とのことだったので、Universal に発注した。ところが丁度生産ラインの休止(?)という悪いタイミングに入ってしまったのか、待てど暮らせど「Back Order」の状態が続き、11 月に発注したのに 4 月になっても商品が届かない。



ポータブル不朽の名機、ICF-2010

しかも Universal はそのあたりの事情を説明する訳でもなく、何も連絡がないまま月日が過ぎていく。そこで業を煮やして「この日までに出荷できなければキャンセルします」と通告したら、翌日「ご要望に従いキャンセルしました」と返信がきた(いい加減にしろっつーの)。仕方がないので Universal 以外の入手先はないかと探す。SONY America の SONY STYLE にはそもそも 2010 がカタログ表示されていないのでダメ。Grove にもない。これ以上の方法が思いつかず、思い余って知人の米国在住の DXer 氏に相談したところ、氏は親切にもわざわざ探して近隣のショップで私のために代理購入して下さいました。ということで無事 10 台目のリグが我がシャックにやって来た。

ノスタルジーの追求(&ストレス解消!)とは言え、今度こそ自分から主体的に購入しに行くということはしないと思う。あくまでも何かの理由で余程お買い得な条件でもない限りは、衝動買いすることもないと思う。

【シャックの相互訪問】

少年時代から是非一度はやってみたいと思っていたのは、他の DXer のシャックにお邪魔することであった。他の DXer がシャックをどのようにレイアウトしているのか、どんな機器を持っているのか、アンテナはどのようにしているのか、ペリはどこを所有しているのか、それ以外にどんな工夫をしているのか・・・とても興味がある。残念ながら少年時代は BCL でそこまで親しい友人ができず、その願望は実現できなかったのである。

復活して幸いにも多くの方と知り合えたので、今度は図々しくいろいろな方のお宅をお邪魔させて頂くことができた。探すと自分の近隣にも DXer は住んでおられるようである（同じ市内にはまだ見つけていないが）。

初めてある方のシャックにお邪魔した時はやはり感動した。見るもの全て珍しく、非常に刺激を受けた。その方はリグはクーガー2200とICF-2010を持っておられたが、それに刺激され結局自分でも入手してしまった。同じくアンテナは自作のループアンテナとフェライトバーアンテナを使っておられたが、それも大変参考になった。自分も絶対に作ろうと刺激を受けたものである（ループは2台作成。フェライトバーアンテナは2003年12月現在未完成）。

勿論シャックは自分だけお邪魔するのではなく、自分のシャックも見て頂くようにしている。私のところでもきっと何かみるべき点はあると思うし、基本的に何でも見て頂いている。このようにしてこれまで数人の方のシャックにお邪魔したが、どなたのところへ行ってもいつも楽しく、必ず発見や学ぶこと、そして刺激がある。

これからも可能な限りいろいろな方のシャックを拝見したいと思うし、私のシャックもいつでもウェルカムなのでお越し頂きたいと思っている。

【MWDX】

2001年秋よりDXの対象としてMWを聞くようになった。自宅でフィリピンやオーストラリアの中波局が聞こえると、ワクワクしてくる。すっかりその魅力に嵌ってしまった。

そもそも中波放送は国内という近距離に向けられた放送である筈なのに、遙か遠くの日本で聞こえるというところに言いようのない不思議とロマンを感じるのだ。丁度小学生だった自分が初めて短波で北京放送を聞いて「外国の放送が日本で聞こえるのか！」と驚いて感激したときぐらいのインパクトを感じているのだ。それとひとつのチャンネルで複数の放送が同時に聞こえるという不思議、しかも長いフェーディングの周期の中で、ある瞬間には国内放送が勝ち、また次の瞬間にはDX局が国内局を打ち負かすという不思議である。

もともとMWDXに興味がない訳ではなかった。中学時代にもアジア、オセアニア、そして北米、ひいてはLAなどの放送を聞いているDXerを凄いと思ったし、自分も聞いてみたかった。しかし当時の自分はループアンテナも持っていなかったし、どうせうちでは聞こえないだろうと思ってトライしようとも思わなかった（いや、トライしたのかもしれないが、ダメだったのであっさり諦めたのかも知れない）。

そんな自分が復活して1年経ってからMWDXをやろうと思ったのは、ループアンテナALA-1530を買ったことが直接のきっかけだった。元々は短波DX用のつもりだったのだが、せっかくループを買うのだから頑張って中波も聞いてみようと思ったのである。それを見越してアンテナを買った直後にローテーターも購入した。設置には思いの外時間と労力がかかったが、出来上がってみると楽しくて意味もなくクルクル回したりして自己満足に浸っている（笑）。

いま一点、私をMWDXに駆り立てたものは、時間的制約というやむを得ぬ事情

であった。仕事の関係でどうしても帰宅が遅くなる。午前0時以降に聞けるジャンルは何かと考えると、その一つに中波があるということに気がついた。確かに中波は深夜や早朝の時間帯でも聞ける。



オーストラリア 558kHz、4 AM のレター

さて肝心の MWDX の成果だが、2 年経ってそれなりにいろいろなところが受信できた。例えばフィリピン、北米でそれぞれ 20 数局、オーストラリアで 10 数局、その他近隣諸国を合わせると MWDX 計で 60 ~ 70 局くらいといったところだろうか。

MWDX をするに当たってのそんな自分の今の悩みは、MWDX に関する情報源が殆どないことである。DXer 自体の数が少なく更に MWDXer の数は極めて少ない。「短波」誌全盛の頃は国内にも相当数の MWDXer がいた。しかし今はもう殆どおらず、どんなところがいつ頃聞こえるのかという受信

ノウハウがないのだ。恐らく上記近隣諸国以外にも、かなりの数の局が聞こえるのではないかと思われる（例えばインドネシアとかサイパン、グアム、ハワイ、中東とかヨーロッパとか）。しかしながらまだ「模倣 DX」しか出来ない自分としては、ほんの少人数の DXer が Web 上に公開されているわずかな情報しかない中で、手探りで探さざるを得ないのである。あとは昔の「短波」誌、「DX 年鑑」くらいか。

2 年前に始めた時は夢の夢であった北米中波 (TP) 局受信もお陰様で 20 局あまりも受信できたのである。



米オレゴン州 1190kHz KEX のレター

これから短波 DX が衰退せざるを得ない中で、MWDX は難しいものの長く取り組めるジャンルであろう。長く付き合っていきたいと思っている。

【ペディションの楽しみ】

ペディションについては、これまで自分

のサイトのペディションレポートや日記でも語ってきたが、改めてその魅力を語ってみたい。ペディションは余りにも楽しく、自分にとっては至福の時である。

まず DX 的な面で言えばノイズの少ないロケーションで、100m を超えるアンテナを張ることができる。当然その結果は素晴らしいものとなり、反動で家で頑張っているのが虚しくなるほどである。

次に受信時間の制約の無さ。自宅だと家族がいるし、ずっとラジオ漬けという訳にはいかない(時々やるが...)。しかしペディションではいくら聞いても誰も文句を言う人は無く、夜遅くまで起きていて、或いは朝早く起きて思う存分聞きまくれる。

もちろんペディションはラジオを聞くことが第一目的であるが、仲間同士のコミュニケーションも、もう一つの大きな目的である。普段我々 BCL は BCL について語る相手がいない。自分の奥さんに熱く語ったところで、冷たい視線が返ってくるだけである(笑)。まあもっともこれだけネット社会になると、BBS とかメールとかチャットとかオンラインでのコミュニケーションは日常的に行っているが...。しかし我々(少なくとも私)はオンラインのコミュニケーションだけではやはり満足できない。断片的な会話ではなく、Face to face で徹底的に語りたかったりもするのだ。もちろんオフ会で飲みに行くのもいいのだが、一旦話し出すともう止まらない。飲み屋で語る時間では十分ではないのである。いつも後ろ髪を引かれながら帰途に着く...そうではなくて、夜を徹して語りたのである。ペディションはそんな欲望を満たしてくれる。

そんなペディションに少年時代から憧れ

たが、ついぞできぬままに少年時代 BCL 期を終えてしまった。その昔、旧 B 連の「Hz」や「短波」にはよくペディションのレポートが掲載されていたが、それは読むだけで楽しくそして羨ましく、何度も読み返したものである。自分もやってみたかったのだが、周囲と一緒にやれる友達もなく、さりとて単独で実行する気概もなく、夢のままに終わってしまったのである。

それだけに復活後やっと思えるようになったのは、何とも幸せなことであった。そして可能な限りそうした機会を数多く設けたいので、私は自分で必要な道具を揃えた。いろいろと工作をしてアンテナや分配器、プリアンプなどを作ったのも、実は他人に依存せずに自分の好きな時にいつでも行けるようにしたかったからであった。

またペディションに行くのに余り遠かったりお金がかかったりしては、しょっちゅう行くことができない。そこで気軽に行ける場所を探して、家から車で 40 分ほどの茅ヶ崎の県営キャンプ場をメインの場所に選定した。中学時代に密かに「ここでやってみたい」と思った場所が、実はここだったのである。無料で使えるキャビンと 200m クラスのアンテナが張れるという点で、ベストではないものの自分的にはまずまず満足している。



茅ヶ崎柳島キャンプ場のキャビン

茅ヶ崎は決して田舎ではないので、もの凄くロケーションが良いとは言えないと思う。本格的にド珍局を狙うのであれば、やはり外房や東北などに行くべきであろう。しかしそれでも住宅地に比べれば、ロケーションはかなり良い。海の目の前という要素も大きい。こうした場所をもう少し増やしたいのだが、残念ながらそうした場所は余り多くない。モバイルワッチならどこでもできるのだが、できることならば酒も飲みたいしゆっくり眠りたいものである。そうすると今度はテントを買って、バッテリーを電源としてラジオを聞く・・・そんなことにもなっていくかも知れない。ペディションの魅力、まさに奥の深い底なし沼といった感じである。

【BCL と工作】

BCL を復活して一年が過ぎた頃から、工作の道にはまり始めた。リグはもはや自作などしようがないが、アンテナを含めた全ての周辺機器は自作が可能だからである。マニアック過ぎて市販されていないものもあるし、あったとしても少量生産のせいか全般的に高価なものが多い。BCL である以上メカには強くありたい。そもそも作るの

が好きであったということもある。幸い周囲にメカに強い方がおられて、いろいろ親切にアドバイスして下さったので、少しずつこの道に入っていった。



アンテナ 2 分配器

一番最初に取り組んだのはアンテナの 2 分配器。これなどは部品代だけだと 1,000 円少々である。市販品は確かに性能も良いのかも知れないが、その 10 倍程度の値段である。ケースの穴あけなど少々面倒だが、製作自体は決して難しいものではない。お陰様で無事完成することができ、この成功ですっかり気を良くしてしまい、少しずつ深みにはまっていくことになる。次に取り組んだのは中波用の同調型シールドループアンテナである。これなどそもそも市販されていない。これに関しては実際に前述の設計者のお宅までお邪魔し、実地でご指導願った。殆ど初心者の自分に



中波ループ用アンテナコントローラー

はなかなか難しく、実際には作って頂いたようなものである。そして途中失敗はしたものの、お陰様で完成させることができた。このアンテナは後述する中波用プリアンプと組み合わせると、私が使用しているALA-1530 と同等の性能を発揮する。一旦ループアンテナを完成させることができたので、次に短波用のループアンテナを作るのは非常に楽であった。

さて、私にとって一番勉強になったのは、プリアンプの製作であろう。何故なら何度も失敗し、やっと完成させることができたからである。回路図から部品を拾い出し、そしてそれをどう配線していくかを勉強したのである。もっともこれは自分ひとりではできず、結局近隣の DXer 氏に指導を仰ぎに伺ったり、メールで教えてもらったり、最後は親切な仲間が実物を送ってくれたりまでした。ここまでやって、都合 4 回失敗してやっと完成したのである。時間もかかったしさすがに途中で嫌にもなりかけたが、ここを乗り越ったのは大きかった。大いに自信がついたからである。



プリアンプ

その自信の芽を確信に変えていったのは、中波用プリアンプを完成させたことである。上記プリアンプと異なり周波数帯は中波専用であり、ゲインも 30dB とかなりハイゲインなアンプである。こちらも設計者の方に一方ならぬアドバイスとご協力を頂戴したが、1 回の失敗の後 2 回目で完成させることができた。これなどは部品点数もかなり増えたし細かいパーツもあって、昔ならとても作ることはできなかったであろう。



中波帯専用プリアンプ

こうなってくると一種の好循環で、成功する 自信がつく 次のものを作る 成功する・・・というループができてくる。従ってその前後にアンテナ 4 分配器も作ったが、こちらも 1 発で成功。ヘッドフォンセレクターの製作にも取り組んだが、こちらも試

行錯誤をしながらも何とか完成させることができた。



部品購入のため足しげく通うラジオデパート

こうやっているいろいろ作っていく過程で、工具も少しずつ増えていった。半田ごては3種あるし、穴あけ作業効率化のためにシャーシパンチや電気ドリルも購入した。今ではこれらを使って効率的に作業を進めることができる。これからも少しずつ工具は増えていくであろう。

いろいろ書いてきたが、自分がこのように工作において成功し自信を持つことができたのも、周囲の親切な皆さんのお陰である。改めてここに感謝の意を表すと共に、今後自分は他の方にそれをお伝えしていくことで少しでも恩返しをしたいと思っている。

【北米中波 DX】

北米中波 DX についてももう少し詳しく触れてみたい。北米中波 DX は小中学生時代

の俺にとっては、憧れの受信ジャンルであった。何故中波放送が、しかもはるか太平洋を越えて聞こえるのか不思議だったし凄いなと思った。しかしなかなか聞こえないだろうし、聞こえたとしても極めて微弱で ID が取れるか取れないかだろうと思っていた。初めから諦めていてチャレンジしたこともなかった（或いはチャレンジしたかもしれないが、早々に断念したのかも知れない）ところが復活してからその道の先輩に話を聞くと、そこそこ聞こえるようである。その方は同じ神奈川県だし、受信設備も ALA-1530 + AR-7030 で全く同じであり、受信できない筈がないと思い始めた。実際にその方と 2002 年 3 月に三浦半島観音崎でミニペディションをやったときは、状態は良くなかったが数局入感していた。そこで 2002 年秋～少しずつ狙い始めた。一番受信しやすいのはアラスカだと聞いて、まずは 780kHz KNOM と 850kHz KICY から聞き始めた。この 2 局は狙い始めて間もなく受信確認することができた。今でも KNOM の ID を聞いたときの感動は忘れない。同じくアラスカの 650kHz KENI も受信できた。



780kHz KNOM (Nome, Alaska)のペリ

ただ確かにアラスカも北米局なのだが、やはり北米といえば本土の局を聞かないと

北米と言えないような気がして、その後は本土、特にカリフォルニア州の局を集中して狙った。そして11月のある日、TP方面が開け1500kHz台を中心として、英語放送が聞こえまくった。これだ！と最も強かった1550kHzに集中する。信号も決して微弱ではなく、S3くらいはある。しばらくIDが出るのを待っているとついにKYCYのIDが出る。これには思わず「やった！」と大声を出してしまい、家内がギョッとした。アラスカ局を受信した時以上の感動だった。20数年の時を越えて、やっと受信できたのだから。

一旦受信できてしまうと、慣れというものには間違いなくあるように思う。「北米中波は聞こえないもの」から「聞こえるもの」に、大きくパラダイムが変わるのである。そしてその日を皮切りに一層TPDXに集中しだし、この年の秋～2003年の3月まではDXの中心は完全にTPDXとなった。TPDXは時期を選びコンディションさえ良ければ（もちろん一定以上のファシリティやロケーションは必要）、決して難しくはないのである。私は同じMWDXでもフィリピンやオーストラリア局の方が受信が容易という先入観があったが、これは全然当たっていない。むしろその逆でさえある。むしろ時間帯が無理のない時間帯（20～23時くらい）にできる、馴染みのある英語での放送であることは非常に好都合である。更に良いのは10kHzセパレーションなので国内局・近隣諸国局に完全にカバーされてしまう確率は低い。選択度の良い受信機を用いてLSB/USBで受信すれば分離可能である。しかも日本でいう中波オフバンド（1600kHz台）にも放送が出ているので、ここでは基本

的には混信がない。そうやって考えると非常にとっつきやすいとも言える。しかし反面難しいのは、これは北米に限らず中波DX全般であるが、IDが出るまでコンディションがもたないことである。確かに正時頃にはIDが出ることが多いが、その前にフェードアウトしてしまうこともままある。それでも苦労の甲斐があって、随分多くのTP局を確認することができた。これから何局受信できるだろうか。今から楽しみである。

【モービルワッチの楽しみ】

モービルワッチもすっかり自分の中で定着したワッチスタイルである。これについても一言語ってみたい。

実を言えば私は元々はモービルワッチに対して、大して期待をしていなかった。確かに私の自宅の環境は都市化が進み悪化しつつあるのだがそれでもまだ良い方であり、モービルワッチをしたからといってそんなに大きな差はないであろうと想像していたからである。やるのであればそれこそ外房とか東北太平洋岸まで行かなければ、それほど成果は生まれまいだろうとタカをくくっていたのである。しかしその考えはたったの1回で根底から覆されてしまった。結論から言う。「これはすごい！」。

都市型ノイズは侮れない。あるところとないところの差は全くもって甚大である。そしてそのノイズの少ない場所は、房総まで行かなくとも家の近所でも発見できるのである（これは住んでいるところにもよるが）。そして車であれば確実にその場所に陣取ることができるのである。

次にアンテナである。私はかつてはRF SystemsのT2FDを、そして現在は

Wellbrook の ALA-1530 ループの 2 つのアンテナを使用してどちらも非常に素晴らしい成果を生んできたが、モバイルワッチで張るアンテナはこれらを完全に凌駕する。都度設置・撤収するのは大変だが、それでも 100m とかそういったレベルのアンテナが張れる（勝手に張ってしまうのであるが - 笑）のである。

「好ロケーション + 優れたアンテナ」で成果が生まれやすいはずはない。実際にこの道の先輩に初めて連れて行って頂いたモバイルワッチで、早くもそれを体感してしまったのだ。私は ID をとり損ねたが、のっけから 120mb のメキシコ局（2390.08kHz R.Huayacocotla）を受信したのである。これには仰天してしまった。決してコンディションが良いとは思えなかった日にである。

もちろん「好ロケーション + 優れたアンテナ」はペディションで実現できるのだが、ペディションに行けるのは年にせいぜい数回である。時間もお金もかかるし、そうやすやすと行く訳にはいかない。しかしモバイルワッチなら年に数回ではなく、月に数回行って大丈夫である。

これらの素晴らしさに今更ながら気づいてしまった私は、いつでも自分の好きなきにモバイルワッチができるように急速に道具を揃えた。以下は先輩の真似をして私が揃えたグッズの一覧である。

1 . バッテリー：初回のワッチのときは車のバッテリーから直に電源を取ったので、バッテリー上がりにならないかとヒヤヒヤしたものである。そこでまずこれを入手することにした。日本電池の PC6100 という 14V のものであったが、残念ながら既に製

造中止であり、メーカーに問い合わせたがいわゆる後継機種は発売されていないとのことであった。どうしたものかと思案していたら、ネットで検索したら運良く見つかった。ネット通販の現金問屋で 4,500 円という破格値で入手。これから手に入れようという方は、こういう現金問屋とかホームセンターとかで流通在庫を狙うのが得策かもしれない。



PC6100

2 . アンテナ：先輩の真似をして 100m の電線を買ってきた。私のは 0.75mm という規格のもので 1,700 円であった。これに巻き取るためのボビン(600 円)が加わる。

3 . シガーライター用電源コード：PC6100 にはシガーライターソケットが 3 口ついていて、ここに接続することになる。市販されているのかどうか知らないが、私は自分で作った。秋葉原で 2.1 のコード付のジャックとシガーライタープラグ（ヒューズ入り）を買ってきてはんだ付けした。

4 . バラン：エレメントとしてのワイヤーからフィーダーとしての同軸ケーブルにつなぐときにインピーダンス変換を行って、利得を損失しないようにしなければならない。これは別の DXer の方にアドバイスを頂戴して、9:1 のものを作成した。



自作 9:1 バラン

5. アンテナ 2 分配器：これは今年に入ってやはり別の DXer の方にご指導頂いて作ったもの。2人でやるときには必携である。

6. プリアンプ：これもいろいろな方にご指導頂いてやっと完成した。アンテナを分配した際にロスした利得を補完する。

7. 懐中電灯：車内は真っ暗であるが、リグや MD を操作したりログを書いたり暗い中では難しい作業も多い。しかしルームランプをつけばなしにするのもバッテリーが心配なので (& 目立つ!) 懐中電灯を使用するのが良いようである。

8. アンテナ線を灌木に引っ掛ける棒：短い物干し竿の先に針金で細工をして、写真のようなものを作成した。



引っ掛け棒

良いことばかりを書いたが、苦労も存在

する。一番気になるのは「怪しい」ことである(笑)。夕方から車の中で一人ヘッドフォンをつけて何かを聞いていれば、これは誰が見ても怪しい。警察に通報されても文句は言えない。作業員に間違えられても仕方ない。それから安全面の問題である。やはり人里離れたところに行くので、非常に物騒である。襲われたら大変である。いつもと言うわけには行かないが、なるべく2人以上で行った方が良いだらう。

さあ、このように私に新しい喜びを教えてくれたモバイルワッチを、来年は何回楽しめるだろうか。今からワクワクしていてもどうしようもないのである。

【DX in Las Vegas】

2003年3月に商用でアメリカ、ラスベガスに行った。丁度 TPDx を始めて夢中になっていたときだったので、絶対ラジオだけは持っていこうと心に誓っていた。ただアンテナとか特別なものを持って行く訳にもいかないので、お供はパーアンテナ内蔵の ICF-2010 に決定した。

ラスベガスまで待ちきれず、トランジットで経由したロサンゼルスで早速聞き始めた。これだこれだ！北米中波だ！聞こえるのが当たり前の北米中波局が SINPO オール 5 状態で聞こえるのに狂喜する。日本でもつい先日受信した 1650kHz KFOX の韓国語が克明に聞こえる。

その日の夕方にラスベガスに到着し、フリーになった夜から聞き始める。まずはラスベガスの 50kW クラスのローカル局である。実に当たり前だがガンガン聞こえて嬉しい。8 日間滞在するので、少しずつ録音を始める。そう、可能な限り録音して後

日レポートを書こうという算段である。



ホテルでの受信光景。リグはICF-2010

聞こえて当たり前の中波だったが、短波がさっぱり聞こえない。やはりホテルはシールドされているので良くないのか。しかしこれほど聞こえないとは・・・ そんな風に嘆いていたが、しばらくすると R.Japan やラジオたんぱはちゃんと受信できた。更に聞こえないという泣き言を米国在住の DXer 氏にメールで送ったらすぐに返信をくれて、こことここを聞いてみるといいといろいろ教えてくれる。日本では余り聞かないが米国の短波で放送を行う宗教局である。可能であれば LA 短波局が聞けないものかと、2010+ワイヤー(ビニル線)をもって野外受信を試みようと思ったが、さすがにいきなり異国の地でやる度胸はなく、それは夢に終わった。次回の課題である。

受信以外にも折角アメリカに来たのだからと、この機会にこちらでしかできないことをいろいろとやる。一つは書籍を買うことである。渡米直前に、以前から探していた受信機の解説本「Radio Receiver Chance or Choice」という本を Amazon.com で発見したのである。そしてその売主は国外には発送しないとしていた。これぞ千載一遇のチャンスである。ならば滞在するホテルに

送ってもらえばいいではないか。売主はきちんと代金さえ受け取ればどこに送ろうと問題ない筈である。そんな交渉をメールのやりとりで済ませ、いざ現地で受け取る。こうして欲しかった書籍を無事手にすることができた。



RADIO RECEIVER Chance or Choice

もう一つの現地ならではの行動は、現地のハムショップに行くことである。日本よりは BCL が盛んな筈だし、思わぬものも手に入られるかもしれない。そんな気持ちでこちらを渡米前に調べておいて、オフになった日に早速訪問した。アメリカは地図では近く見えても、実際には結構遠かったりする。この店も市内にあったのだが、バスを乗換えていく。行ってみるとそれなりに立派な店構えだった。大きいとまでは言



Las Vegas で訪れたハムショップ AES

えないが通販もやっているようで、電話での注文を受ける店員が忙しそうにしていた。とは言えやはりアメリカでも BCL はマイナーである。BCL 用のものは特に置いていない。気を引いたのは雑誌 Monitoring Times。以前通販で買おうかなと思ったこ



Grove より発刊されている Monitoring Times

ともあり興味があったので、迷わず最新号を購入。それと最近ヘッドフォンが壊れてしまったのだが、その代替品はアメリカ

で買った方が若干安かったのも購入。お金を支払う際に「日本から来た」とか「北米中波をきいている」などと店員に話し掛けてみる。「そうですか」とそれなりに聞いてくれるが、MWDX はこちらでもメジャーではないのか、関心は今ひとつのように思われたので、それ以上突っ込むのは諦める。帰国の飛行機では、溜まった受信音を聞いてレポートを書き始める。中波局 10 通 + ラジオたんぱの計 11 通を出す。さあ何通返信が来るかと楽しみにしていたが、蓋を開けてみると来たのはわがラジオたんぱと 680kHz KNBR(San Francisco)と 770kHz KKOB (アルバカーキ)の合計 3 通だけ。これにはガッカリであった。



1070 Los Angeles の KNX のペリ

でもまた海外に行く機会があったらラジ

才を持って行きたいし、現地でしかできないことをいろいろとやってみたいと思っている。

【国内中波 DX にはまって】

2003年6～10月に国内中波DXにはまった。元々は海外中波を聞こうと思っていたのだが、国内局の混信でよく聞こえない。そこで国内局が出ていない時間を選んで聞いてみようと考えた。つまり本来の目的を達成するのに「敵を知る」ために、放送時間をいろいろ調べていたのであった。ところがそのうちにその「敵」自体に関心が移ってきた。「この局はどここの局なのだろう」と。そうしているうちに、国内局でも受信の難しそうな局にはトライしてみたいと考えられるようになった。難しいところ - 距離的には沖縄である。そこでまずは沖縄にターゲットを絞ってみた。

沖縄には2つの中波局が存在する。738の琉球放送と864のラジオ沖縄である。どちらも他の国内局と混信するチャンネルだが、738の方が混信が少ないのでまずはこちらから狙ってみた。このチャンネルは北日本放送の方が強力でカバーされてしまうので、同局のいない時間を狙うしかない。

そうすると必然的に日曜深夜(月曜未明)の放送終了時に限定される。ということで1:30前に狙ってみると、国内局はいないがKBSが強力に居座っている。しかし耳を澄ますと・・・その裏で弱々しく日本語が聞こえてくる。そしてまもなく終了音楽とIDが出て同局であることが確認できた。嬉しかったし、ちょっとしたDX局が受信できた喜びがあった。



738kHz 琉球放送のペリカード

次に864であるが、同波には国内局だけで6局も出ている。時間帯を選んで聞かないと、完全にブロックされてしまう。そこで他局不在の時間がないかどうか調べるために、「ラジオ番組表」を買ってくる。ところが何を見間違えたのか同局が単独になる時間帯はないものと思ってしまい、混信が最小になるであろう放送終了時に狙ったが、ナイターの影響もあってか国内局だらけであり、影も形も拝めなかった。

そこでもう一度「ラジオ番組表」を眺めてみると、同波で一番最初に開始する局はラジオ沖縄だったのである。そう、同局単独になる時間帯があったのである。そこで放送開始時にリトライすると、4:50の放送開始に先立って4:44から民謡が流れ、もしかしたらと構える。しかしS3と強力なので、同局ではないのではないかと考えて

ID を待つ。するとまもなく同局のコールサインと ID が流れる。これには驚いた。何だ、あっさり聞こえるじゃないか - そう思っていた次の瞬間、4:52 には同波の他局のキャリアが出てきて、ラジオ沖縄はあっという間にカバーされてしまった。ということでラジオ沖縄は聞こえるが、そのチャンスは一週間であつた 8 分間である。



864kHz ラジオ沖縄のペリカード

しかし実は受信が最も難しいのは沖縄ではなかった。そう、障害は「距離」よりも「混信」なのであつた。関東地方で受信が困難なのは、九州の 4 局 - 宮崎放送、熊本放送、長崎放送、大分放送 - である。この 4 局を総称して私は「九州カルテット」と名付けたが、これがなかなか難物である。周波数表を眺めるとすぐ分かるのだが、九州と東北の 5kW 局は同一周波数を使用している。936 は宮崎と秋田、1197 は熊本

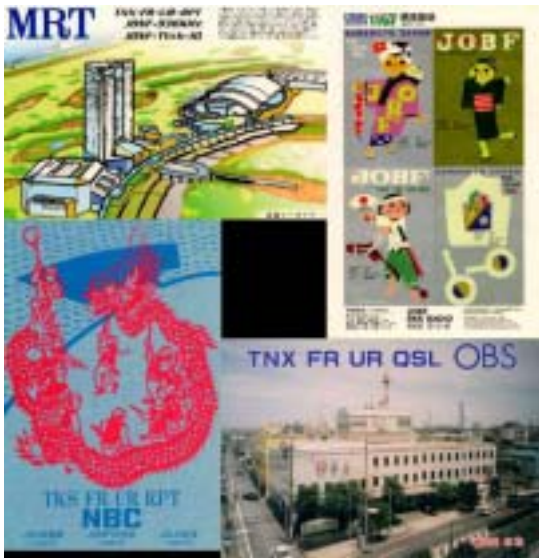
(10kW) と東北ではないが北関東の茨城、1233 は長崎と青森、1098 は大分と福島といった具合である。要は少ない周波数を混信しないように有効活用しようということなのだろうが、関東では概して東北局が強く、九州局は時間がずれない限り潰されてしまう。それがこのカルテットなのである。そのことに気づき俄然ファイトが湧いてきて、このカルテット制覇の挑戦が始まることになった。

その中でも一番受信しやすかつたのは宮崎だつた。これはライバルが秋田だけなので、これに混信して弱く聞こえてくることがある。0 時に正時の ID が取れてまず 1 局。

次は熊本。この局は日曜深夜の終了が茨城よりも遅いので楽勝かと思いきや、北海道の STV ラジオが強くて結構聞こえないのである。それでも 1:30 の終了アナウンスは聞き取ることができた。これで 2 局。

やはり難しいのは長崎、そして大分である。長崎は信号が弱く、kW に満たない和歌山にすら負けそうである。おまけに 1242 のニッポン放送のサイドが強い。キツかつたが、月曜朝の放送開始時に弱々しい開始アナウンスを聞くことができた。

そして最後に残つたのは大分放送であつた。この周波数はラジオ福島と信越放送が一騎打ちをしている上に、更に KBS が参戦してくるのだ。大分の付け入る隙はなく、なかなか受信できなかつた。時折それらしき影は踏むが、ID までは行き着けない。しかしここも月曜 5 時の放送開始時に大混信の中、弱々しい開始アナをとることができた。ふうーっ、これで制覇だ。



上段左：宮崎放送、右：熊本放送

下段左：長崎放送 右：大分放送

国内民放中波 DX なんて海外 DX から比べれば遊びだと思っていたが、なかなかどうして長崎・大分は結構難易度が高いし、どう攻略するか戦略を立て実行するのが面白かった。既に成功した方のアドバイスは「夕刻を狙え」であったり「カーラジオで受信せよ(感度がいいらしい)」であったりでなかなか面白かった。「ラジオ番組表」で他局とぶつからない時間を探し出して受信したりとか、それはそれは楽しいゲームであった。

海外 DX だけをやっている、コンディションが悪かったり返信がこななかったりするとスランプに陥ってしまう。そう、確実に返信が来るのも国内 DX のいいところである。国内旅行をしているような気分になれるのも楽しみのひとつである。

多くの方にお奨めしたい遊びである。早速始めてみては如何か？

【BCL 書籍について】

BCL を復活して一番惜しまれたのは、そ

の昔毎月のように購入してバイブルのように何度も読み返した BCL 書籍を全て処分してしまったことであった。今から考えると何とももったいないことをしてしまったのかと、後悔の念で一杯であった。

2003 年の今、世の中の書店では BCL 関連の書籍は皆無である。これは何とも寂しい。ここではそんな BCL 関連の書籍について少し語ってみたい。

BCL 復活前

自分が一番読んだのは、前にも触れたが「最新世界の放送局ガイド」という本であった。この本は文字通り擦り切れるまで読んだ。あまりに何度も読んだため、痛みが激しくガムテープで止めたりもしたが、最後はボロボロになってしまい廃棄せざるを得なかった。

次に読んだのはやはり「短波」である。毎月 8 日が本当に楽しみで楽しみで仕方がなかった。必ず発売当日に書店に走ったのである。こちらも何度も読み返したりアンダーラインを引いたりしてりして、擦り切れてしまった号もあった。

そして日本 BCL 連盟の会報であった「Hz」誌。短波に比べると情報量は比べようもないが、製作記事があったり、DX レポートがあったりと、小粒ながらピリリと辛い楽しい雑誌であった。中でもミーティングやペディションのレポートは読んでいて楽しく、自分と同じ年代の BCL が生き生きと活動している様子を見て、自分もその仲間に入っていきたいと思ったものである。(残念ながら近隣のミーティングの中では嗜好が合う人もあまりおらず、「Hz」を羨ましげに眺めるばかりであった。)

最後に「DX年鑑」である。私は1980年版のみ購入した。何故なら80年でほぼ活動



BCLに最高に燃えていた時に購入したDX年鑑1980を停止してしまったからである。これには笑い話のような実話があるのだが…私の悪筆に発する話である(私は実は大変な悪筆である)。多分80年の後半or81年の話だったと思われるが、一旦は停止したBCL活動を復活しようと思ったことがあったのだ。そしてそのきっかけとして最近の状況を確認しようと、DX年鑑1981を書店に買い求めに行ったことがあった。しかし店員に「紙に書いて下さい」を言われ書いて差し出したところ「x(マルバツ)年鑑…ですか?」と聞き返されて、恥ずかしいやら腹が立つやら(そんな名前の本ある筈ないだろ!)で、「あ、もういいです」とあっさり帰ってしまったのである。あの時自分が短気を起こしておらず、じっくり探して取り

寄せてもらっていただければ人生は変わっていたかもしれない。

BCL復活後

さて復活後であるが、もはやBCL関連の書籍などというものは世にはなかった。しかし探したり取り寄せたりすることによって、数冊の書籍を入手することができた。

洋書では定番「WRTH」と「PWR」を毎年買っている他、バックナンバーも両方合わせて20冊近く入手した。しかし英語の本というのはじっくり読むという気にならず、一度ざっと目を通すと、ほとんど本棚のオブジェと化してしまう(笑)。やはり日本語のものが読みたい。以下はBCL復活後入手できた、数少ないBCL関連書籍である。

「世界を聴こう - 短波放送の楽しみ方」は小さな本だが良くまとまっており、何度も読み返した。ただし93年出版なので復活時点(2000年)でも、かなり内容的には古くなってしまっていたのは否めない。

同じ新型コロナシリーズの「電波で巡る国ぐに」は2003年春に購入した。この書籍の存在自体はかなり前から知っていたのだが、ノウハウ本でないBCL書籍の面白さというのがピンと来ずに、買わずにいたのである。しかし今年になって、実はBCLの楽しみ=日常を描いた本はそれ自体面白いものではないかと思い直して取り寄せて読んだところ、まさにその通りで、早く購入しなかったことを後悔した。その後どうなったのか、続きを読みたいところである。

「BCL実践ハンドブック」と「ワイドバンド受信ガイドブック」は、秋葉原のロケットでデッドストックを見つけて購入したもの。現存する書籍としては最も新しいが、それでもそれぞれ95年、97年の刊行であ

り、内容も古くなりつつある。しかし BCL ブーム後の動きや最近の BCL 界の概況を知る意味でも、この 2 冊には大変お世話になった。

このように書籍を求めて古本屋、ハムフェア、Amazon.com、ネットオークションなどでいろいろと探した。そんな苦勞のかいもあって、今自分の書棚には、次のような書籍が収納されている。

- ・ DX 年鑑 1980 ~ 1983
- ・ 短波誌 9 冊
- ・ 世界の放送局ガイド
- ・ 最新世界の放送局ガイド
- ・ BCL QA ハンドブック
- ・ PWR1990 ~ 2003
- ・ WRTH1978、1986 ~ 89、1995、1997、2001 ~ 03
- ・ 世界放送局めぐり
- ・ Shortwave Receiver Past & Present
- ・ Radio Receiver Chance or Choice
- ・ Buying a Used Shortwave Receiver
- ・ BCL 実践ハンドブック
- ・ 短波放送実践編
- ・ 世界を聴こう - 短波放送の楽しみ方
- ・ 電波で巡る国ぐに
- ・ BCL 用短波ラジオの作り方
- ・ 日本短波クラブ創立 50 周年記念誌
- ・ おとなの工作読本 ラジオ少年の時代
- ・ Radioactive
- ・ Callsign バックナンバー

今後も BCL 関連の書籍が発刊される可能性は高くはないだろう。とても寂しい。何度も繰り返し読めるような、そんな書籍が欲しい・・・ならば他人が書くのを待っていないで自分で書いては？勿論書店で売るよ

うなものは作れないが、ネット上のバーチャル書籍 (PDF ファイル) だったら実現可能である。

そんなことを考えていて、遂にこの書籍の刊行を実現することになった。本当に自己満足以外の何ものでもないのだが、同じように BCL 書籍がないのを寂しいと思っている方がおられたら暇つぶしにはなるだろう。是非最後までお付き合い頂きたい。

【BCL 書籍を探して】

冒頭で触れたように、私が BCL に出会ったのは小学校 5 年生のときである。北京放送を偶然受信したのが一番最初であるが、これに先行して雑誌で BCL 関連の記事を読んだのがそもそものきっかけであった。小学校の図書室で「子供の科学」の中の記事であったと記憶していた。BCL 復活以来、きっかけを作ってくれたその記事の内容であるとか誰が書いたのかとかを確かめたいものだと思っていた。そんな思いが嵩じて、雑誌名と「ラジオを聞いてカードをもらおう」というタイトルだったという記憶を頼りに、ルーツ探しを始めてしまったのである。

最初トライしたのは子供の科学の発行元である「誠文堂新光社」にメールを出すことであった。或いはバックナンバーを閲覧させてもらえないかと思ったのであるが、HP のご意見欄に問い合わせ内容を書いて送ったにもかかわらず、残念ながら返信はなしのつづてであった。

そこで次に古本探しに重宝する「easyseek」(<http://www.easyseek.net/>)のページで検索する。すると可能性があると思われる 1975 年発行の号が出品されてい

る。そこでこの出品者（古本屋）にメールを書き、「掲載されていたら必ず購入するので」と、上記タイトルの記事が掲載されている号がないかどうか調べてもらった。本屋の方は調べて下さったが、結果は残念ながら「該当なし」であった。あれ、75年じゃなかったか？それとも子供の科学じゃなかったのかな？いずれにしてもモノが出品されない限りここではこれ以上探しようがない。

最後に行き着いたのは公共の「図書館」に行くことであった。ここなら今でも置いてあるところが多いし、或いはバックナンバーも所蔵している可能性がある。そこでまず地元である神奈川県の県立図書館を調べた。今の時代はあらかじめインターネット経由でそれぞれの図書館の蔵書を検索することができる。検索結果によると県立図書館は2箇所あるが、一応バックナンバーを保有しているようである。しかし本当に「子供の科学」だったかどうか、また掲載されていた号も分からない。そこでとりあえず行ってしまった方が早いだろうと、まずは桜木町にある図書館に出かけた。

このとき家族サービスを兼ねて同伴で行ったのがまずかった。2歳の娘がいては落ち着いて本探しなどできない。館内のパソコンで少し検索して、どうやら自然科学系の書籍はもうひとつの県立図書館である川崎の方が充実しているようだと知ると早々に立ち去って、みなとみらいの遊園地に行く羽目になる。

そこで後日改めて、今度は一人で川崎図書館に出かけた。早速司書の方に相談すると、「雑誌のバックナンバーの保存期間は1年だけ。桜木町の図書館にそこそこのバック

ナンバーがあるようだ。」と言われた。しまった！やっぱり桜木町だったのか。しかしよく聞くと60年代と80年代のものはあるらしいが、70年代のものは桜木町にもないらしい。仕方がないので諦めて、とは言えせっかく来たのだからと所蔵してあった「BCL用短波ラジオの作り方」他数冊の本を閲覧して帰る。

こんな過程を自分のHPのDiaryにアップしておいたら、知人DXerのT氏がメールをくれて、ご自身も関心があるとのことで調べて連絡をして下さった。それによると70年代を含めたバックナンバーは、東京都立図書館にあるとのことであった。そこで時間ができ次第、そちらへ行くことにする。



東京都立多摩図書館

梅雨の晴れ間を狙ってバイクを飛ばし、1時間強で着いたのは立川にある東京都立多摩図書館。着くやいなやすぐに司書の方に希望図書を伝える。75年でないことは分かっているので、子供の科学だとすれば74年が怪しい。そこで74年1年間のバックナンバーを請求すると、数分後に出してきてくれた。受け取るとすぐに目次を繰り始める。12月号から遡って11、10、9と見ていったところで、ついに見つけた。探していたあのタイトル「ラジオを聞いてカードをもらおう」は9月号にあったのだ！

慌ててそのページを開くと・・・間違いな

い、あの記事だ！自分を BCL ワールドに誘ってくれた懐かしい記事と遂に再会したのである。タイトルもそうだったが、内容も大体自分の記憶の通りであった。わずか 3 ページの中にペリカードについて、受信報告書の書き方、SINPO コードのつけ方、日本向け日本語放送などが詰まっていた。

「これだこれだ！」とまずは懐かしく読んで、そして今度はこれを見失うまいとコピーサービスでコピーをしてもらう。落ち着いたところで、誰がこの記事を書いたのかを確認する。その人は・・・ああ、この方だったのか！その方は何と「最新世界の放送局ガイド」の著者の板橋聰光氏であった。ということで自分の第一次 BCL 期は、全て板橋氏にきっかけを作ってもらっていたことがはっきりした。深く感謝する他ない。こうしてコピーを済ませ他の BCL 関連の書籍を閲覧し、1 時間ほどで図書館を辞す。

お蔭様で無事に探し物を発見することができたのだが、この一連の本探しゲームはなかなか面白かった。特に図書館めぐりは、こんな本もあるのかと驚いたし懐かしい本にも出会えて大変面白かった。皆さんも懐かしいあの一冊に出会いたければ、図書館でお探しになることをお勧めする次第である。

参考：東京都立多摩図書館のホームページ
<http://www.library.metro.tokyo.jp/14/>

【受信報告書を書くということ】

BCL の楽しみのひとつにペリカード収集というものがある。各局ともにリスナーからの受信報告に対して確認のカード（レター）を発行してくれる。BCL ブームの頃は、リスナーの目的はこれであった人が非常に

多かったと言われている。そしてペリカードを数枚集めたらそれで満足し、BCL から離れてしまった方が多いようである。私もご多分に漏れず数局にはレポートを出して、実際にペリカードをもらった。しかし私の場合はその後の興味の対象は DX に移り、ペリカード集めにはあまり執着しなくなった。もちろん私とて欲しくない訳では無かったが、語学力の無い自分が放送内容を理解しそれをレポートに書くことなどできないと思い込んでいたためであった。カセットテープによる受信報告を受け付けてくれないのかと真剣に悩んだものである。

しかし 20 年の中断を経て、様々な思い込みを乗り越え、私は幸いにもどこの言語の局でもためらわずにレポートが出せるようになったのである。

復活までの 20 年間で、英語だけは多少は理解できるようになっていた。従って再開後に早速英語放送に対してレポートを書いてみようと思い、一番最初は VOA の Special English に対して、しかもメールで送った（何故かこれに対しては返信が来なかったが・・・）。ということで受信状態の良い英語放送を選んでレポートを出すようになり、主要各国の国際放送のペリはかなり集まってきた。

次に英語以外での放送に対してもレポートを書いてみようと思った。英語以外の言語を勉強したのはスペイン語とドイツ語だが、共に挨拶レベルでとてもリスニングやライティングはできない。従ってこちらは一生縁が無いものと考えていたが、ある日ミーティングに出席したときにある方からインドネシア RRI の地方局のペリレターを見せて頂いた。非常に感心してどうやって

聞き取ってどうやってレポートを書いたのか、率直に質問してみた。するとその方は「何を話しているかということは分からなくて当然。自分も分からない。しかし出たID、また放送内容がどんなものであったのか(話、スポーツ中継、音楽、歌)、アナウンサーや歌手の性別、曲がかかったのであればそのジャンルなど、『確認してもらう材料』なら書ける。またレポートを書く際に使用する言語は英語でよいところが多い。」と教えてくれた。これは目から鱗だった。なんだ、そんなので良かったのか！それなら俺にも書けるじゃないか。そう思って早速チャレンジすることになった。

一番最初にチャレンジしたのは Cyprus の Cyprus B.C.。Cyprus にしたのに特に意味は無く、たまたまその頃によく聞いていたので、そこに出したに過ぎない。使用言語はギリシャ語である。そしてレポートを英語で書いて送って返信を待った。本当は Cyprus が第3国語での放送に対するペリ取得第1号になる筈だったのだが、返信が滅茶苦茶早かった R.Denmark(デンマーク語)に抜かされ、第2号になった。これに



地中海ムード一杯の Cyprus B.C.のペリ

自信をつけて、第3国語でも躊躇無く出せるようになった。

次なる自分の先入観は「受信状態の悪い

局のレポートは出せない」というものであった。いわゆる DX 局は受信できても受信状態が悪くなくまた受信時間も短い。これではレポートなど書ける筈がないと、最初から諦めていたのである。しかしこれに関しても、「短くても大丈夫」とのアドバイスを別の方から頂いた。DX 局に対する初チャレンジは、今は無き Saipan の中波局 KSAI。受信状態も今ひとつだったししかも言語も現地語が入ったりで、昔の自分ならばレポートのレの字も思いつかないような局であったが、これにも果敢にチャレンジして、閉局前のペリを取得することができた。



KSAIのペリ。KFBSとなっているのが残念

それでは英語の通じない国に対するレポートはどうすればいいのか？ここまでくれば、さすがに自分も迷わなかった。「その国の言葉で書くだけである」と。もちろん世界的にも非常にマイナーな国の言語では書き様が無いが、メジャーな国の言語であればレポートの雛型くらいは手に入るし、大半の国はそれで使えるはずである。例えば中南米であればスペイン語とポルトガル語、アフリカであればフランス語である。これらの雛型は、日本 BCL 連盟の事務所にお邪魔して、短波誌のバックナンバーをコピーさせてもらった。そうしてスペイン語のレポートを書き、昨年初めて南極 R.Nacional

に対して送ってみた。そしてその返信が 230 日後に届いた。南極の受信を確認してもらったという嬉しさはもとより、スペイン語レポートが何とか使えたということもそれ以上の喜びであった。



南極 R.Nacional のペリ

もうひとつの工夫として 2002 年から始めたことは、レポートに書ける要素がちょっと薄いという局に対しては、受信音を同封することである。その昔はカセットテープしか考えられず、かさばるししかも 1 本数百円するし、その分送料も高くなるしと大変だった。しかし今なら受信音を MP3 に変換して、FD (その後はミニ CD-R) に入れて送るという芸当も可能である。最近では専らこれを同封して、受信の証明をするようにしている (こう書きながら気づいたのだが、音声ファイルだけはメールで別送しても良いかもしれない。そうだ、それがいい！)。

いろいろと入門者的なことも書いたが、同じような悩みを持っている人は少ないと思ったので、恥ずかしながら自分のこれまでの経験を書いてみた次第である。これによってもう一度ペリカードを集める楽しみを見出す方が出てきたら幸いである。

【秋葉原を歩く】

秋葉原は私のワンダーランドである。歩くだけで楽しい。もちろん何か買えればもっと楽しいが。この街に初めて来たのは中学 2 年の大晦日の日。父親に同行してもらって、YAESU FRG-7 を買ってもらった時のことであった。それまで雑誌の世界だった秋葉原の印象はとてつもなく鮮烈で、「すげー、こんなに沢山電気屋がある！」と大変驚いた。まさに BCL ブームの真っ只中であったので BCL をウリとするショップがいくつかあり、FRG-7 も今はなきカクタエックスワンで購入したのであった。そこには FRG-7 の他雑誌でしか見たことのない受信機がわんさと並べてあり (BCL ブーム最盛期には近所のユニーにさえ BCL ラジオは売られていたが、それはほんの一部であった。実際にスカイセンサーはユニーで買った。) に夢心地だった。まさにワンダーランドであり、「今日は帰りたくないの」という言葉は、まさにこういう日のためにあるのであろう。

その日を皮切りに中学時代に秋葉原は何度か訪れた。そして BCL 中断とともに、秋葉原とも疎遠になってしまう。その後 30 代になって突如アクションバンドに目覚めた時とパソコンの自作にはまった時に数回通ったが、用が足りてしまうそれ以上は来なかった。

そして BCL を復活して、また改めてこの街に通うことになる。受信機は近所のハムショップで買ってしまったのだが、実物をいろいろ見たくてこの街にやってきた。近所のハムショップレベルでは、さすがに BCL 用受信機まで展示しているところはない。見たいときはどうしても秋葉原になってしまう。ロケット、富士無線あたりは必

ず立ち寄ってしまう。



今なお大きな店舗を構えるロケットアマチュア無線本館



展示してある受信機の種類が豊富な富士無線

そうは言ってももはや受信機そのものの種類が少ないのは残念である。そしてアンテナ関係の小物とか、その他備品を買って行くことが多い。ベランダへの取付金具、ローテーター、同軸ケーブル、アース棒等々である。またよく中古のリグとかが展示してあったりするので、これらのチェックは欠かせない。それとデッドストック。実際に既に製造中止になっていた NRD-535 のオプション BWC ユニットはメーカー・流通在庫がなく入手をを諦めていたら、運良く T-ZONE で売られていたのを発見して購入した。それから頻りに立ち寄るのはラジオデパートと千石電商、秋月電子などのパーツショップだ。受信機、アンテナが揃い

周辺機器に目が向いたところで、自分で作ろうと思いパーツを求めてこれらの店を徘徊し始めたのである。これらの店は何度も訪問している間に、どの店のどの辺りに何が売られているのかがインプットされていた。

今歩いて楽しい街であり、ラジオも電気工作もパソコンも好きな私は 1 日いても飽きない。しかし秋葉原自体は家電の街からパソコンの街に、そしてアニメ・フィギュアといったマニアの街に変貌を遂げつつある。これから先どんな街になっていくのだろうか。でも我々 BCL が楽しめる街であり続けて欲しいものである。

【インターネット】

20 年前と今とでの最大の変化は、給料をもらうようになったということともうひとつはインターネットの出現であろうか。当時インターネットなどという便利なものがこの世の中に誕生して来るなどということは、想像だにし得ないことであった。20 年前には本場 NDXC で、アマチュア無線を使った「QSO ミーティング」というものが行われており、リアルタイムで情報交換ができていいなーと憧れたものであった。もちろんこちらで聞こえるはずも無いし、そもそも無線機も無かったし名古屋近辺の人だけに許された特権だなーと大変羨ましかった。大体自分の情報源と言えば「短波」と「Hz」に限定されており、しかも雑誌という紙媒体であるという性格上リアルタイム性に乏しく、そこに掲載されているのは最新で 2 ヶ月くらい前の情報であった。当然この間に状況は刻々と変化していき、例えば珍局がある一定の時期に聞こえたとして

も、それがレポートされる頃にはもう聞こえなくなっているということはよくある話であった。

そしてインターネットの出現はこれを根本から覆した。情報を入手する際にインターネットの果たした役割は計り知れない。そもそも復活のきっかけはインターネットであったし、復活のために必要な情報のほとんどもインターネットから入手した。そしてBCLなりDXを日々行っていく情報源もインターネットである。アクティブなDXerのホームページを覗くと掲示板があり、そこを見れば無料で、しかも基本的にほぼリアルタイムな情報を入手することができる。昔から見れば夢のような世界がそこにあった。

インターネット～短波放送の存在意義を脅かすという意味でBCLにとっては諸刃の剣とも言える。しかしインターネット全盛の世の中に逆らっても仕方がない。自分達は恩恵は十分頂戴したいと思うし、情報を発信する放送局側には、放送波とインターネットとを上手く共存させていって欲しいと思う。

【BCL ライフとパソコン】

多くの方がそうであると思うが、私にとってパソコンはBCLをやる上で必須のアイテムとなっている。これがなくては殆ど何も機能しないといっても過言ではない。それではここで私の使用しているパソコン及び周辺機器とその用途について語ってみよう。

まずパソコン本体は4年前に自作したDOS/V機である。4年前なのでCPUはCeleron300Aという既に過去のものだが、

使用に際しては余り不便は感じないのでそのまま使用している。メモリのみ今日的に256MBにしている。次に周辺機器ではインターネット接続用に、ルーター内蔵ADSLモデムが設置されている。プリンターは少し前のモデルのインクジェットが1台ある。そしてスキャナー、デジカメ、とまあこんなところか。

これらの機器は、BCLをやるに当たってフルに活用されている。まずは情報入手、発信のためにインターネットが最大限利用されている。HP作成に当たってはMicrosoftのFrontpage、それとPDF作成用にAdobeのAcrobatがインストールされている。時々音声ファイルを作るためにWindows付属のサウンドレコーダー、そしてそれをmp3にエンコードするにはフリーソフトの「午後のこーだ」を使用している。余り使わないのだがCD-RWドライブもついているので、レポートに同封してCD-Rで受信音を送ることも可能である。

デジカメは写真を送ったり掲載したりする上で欠かせないものになっている。これに加えてVericard Gallery用に、また書類のデータをネットで送るためにスキャナーを用いているが、これには大変重宝している。オークションでわずか1,200円で買ったものでスペックもやや古いが、実際には前オーナーは殆ど使用しておらずもちろん完動だしとてもきれいだった。そして画像はやや粗いもののまあまあ何とか実用にはなっているので満足している。

受信報告書等ドキュメント作成にはWordを使っているが、ワープロソフトが使えるようになったというのは、昔では考えられなかった大きなアドバンテージである

う。特にレポート作成を簡素化してくれた功績は余りにも大きい。受信データの管理には Excel を利用しているが、特にソート、フィルタリングの機能は重宝する。もはや Word、Excel のない BCL ライフなど想像もできない。

これらに加えて去年は、受信機をパソコンから制御するというを試みてみた。使用したのは ERGO3 のデモ版であったが、パソコンのデータをインプットしておけば、それに基づいてリグがコントロールされるというのは便利で興味深かった。メモリ管理に関してより便利な機能を持ったアプリがあれば導入してもいいかなと思っていたのだが、NRD-535 はもう昔の機種であり残念ながら見当たらなかった。ところが今年に入って N88BASIC を使った簡単なプログラムでメモリ管理を行うという話を、先輩 DXer 氏のサイトでお伺いし詳しくお話を伺ったところ懇切丁寧にご指導下さって、その希望を実現してしまった。ほんの少し試行錯誤があったがあっという間にできてしまったのである。ソフトはフリー、クロスケーブルは既に持っていたので費用は一切かからず。これで自由にメモリを追加したり削除したりソーティングしたりフレキシブルに対応できる。感謝することしきりである。

まだまだパソコンの力を借りられる余地は大いにあるだろう。充実の BCL ライフのためにいろいろ研究していきたいと思っている。

【V/UHF DX】

BCL を復活して半年ほどしてから V/UHF DX にトライした。きっかけは BCL

ミーティングに出席した時に、ここ数日 E スポが発生していて近隣諸国の FM がよく聞こえるという情報をもたらしたことによる。

そういうジャンルがあるということは知っていたが、難しそっだしなかなか受信できないだろうと思って、それまで全くトライしていなかったのである。そもそも以前は V/UHF 帯が聞ける受信機を持っていなかった。

しかしこれも復活後に航空無線受信用に MVT-7100 を買ったのだが、これは広帯域受信機なのでこれで聞けない周波数はほとんどないのである。アンテナはこれまた広帯域のアマ無線のモバイルアンテナであったが、ものは試しだから聞いてみよう、ある休みの日の日中にスイッチを入れてみた。すると・・・聞こえるわ聞こえるわ、もう中国語、韓国語のオンパレードである。しかもそのうちの何局かはかなり信号も強い。「凄い凄い！こんなに強力に、こんなに沢山入るのか！」とすっかり驚いてしまう。そしてあんなに遠くの FM の電波が届くという自然の脅威に、すっかり感動してしまった。



YUPITERU MVT-7100

通常であればこのままはまってしまうところだが、今のところこのジャンルには全然熱心になってはいない。理由はいくつかあるが、ひとつには短波・中波を聞くだけで手一杯でとても V/UHF を聞いている時間がないこと。なおかつ所帯持ちが休日の昼間に部屋に籠っているというのは、とても許されるものではない。中国語・韓国語に全く縁がないというのも一因である。またリグ・アンテナ共にその後投資をしておらず、機器が貧弱であることも理由の一つである。

ところがその後 ICF-2010 を購入したので図らずもリグは揃ってしまい、またこれも狙っていたわけではないが ALA-1530 は FM くらいであればどうやら対応してしまうことも後に判明した。従って本格的に珍局を狙うのでなければ、機器の問題は解消してしまったことになる。とするとあとは時間の問題だけである。

今は幸いまだ短波や中波で DX が楽しめるが、あと何年かするとノイズ環境や局数の減少の問題で短波・中波 DX ができなくなってしまいう時代が来るかも知れない。その時こそ V/UHF DX を本格的に始めるときかも知れない。その時までこの楽しみは取っておいても良いのではないだろうか。

【BCL で芽生えた交友関係】

社会人になって、しかも 30 代半ばを超えてから、仕事以外で友人を作るのはなかなか難しいことではないだろうか。新たな交友関係を作る時間も機会も少なく、簡単にはいかない筈である。しかし私は 36 歳のときに BCL を復活して以来、非常に多くの方と知り合うことが出来たのである。

知り合うきっかけ、そしてお付き合いの場は大半が「ネット」である。その昔、BCL の友人を作ろうと思ったら BCL サークルのミーティングに出席するか、それこそ「CQ」のような専門誌の文通欄にでも投稿して呼び掛けなければなかったであろう。

私も復活した当初は町田ミーティング及び関東 DXers サークル(KDXC)のミーティングに出掛けて行った。もちろんそこでも何人かの方と知り合えたし、そのご縁で KDXC の運営のお手伝いもさせて頂くことになった。

しかし何と言っても交友関係を広げたのはネットである。各 DXer のサイトの BBS での発言したことをきっかけに交流が始まったケースは非常に多い。そこからオフラインで会う友人が出来、またその方の紹介で某サークルの仲間に入れて頂くことになり、さらに多くの方と知り合えた。

もうひとつのきっかけは自分の HP であ

る。BCL に対する自分の想いを同じ趣味を持つ人に伝えたくサイトを立ち上げたのだが、そこに対して想像以上に多くの方から感想やご意見を頂戴し、そこからまた交友関係が芽生えた。

交友関係とは言っても皆忙しい社会人ばかりだし、住まいも全国あちこちに及んでいるので、そう簡単に会うことは出来ない。お付き合いの場もやはりネットである。メール、BBS、チャットをその場として、時間・空間を越えて交流する - まさにネットなしには成立し得ない友情であろう。

こうして多くの仲間を作っただけでなく、かつて雑誌でしか名前を拝めなかったような方、憧れの DXer とも言葉を交わしたり知り合えたのも大変嬉しいことであった。実際に会う機会は年数回の飲み会とペディションくらいしかなく、メールではお付き合いしているものの、一度も会ったことがない或いは声も聞いたことがない、顔も見ることがない方が大半である。これから長い年月を掛けて機会を積極的に求めて、多くの方とお会いしていきたいと思っている。

【終わりに～BCL ブームよ、もう一度！】

これまで長々と駄文にお付き合い下さった皆様に、改めて感謝申し上げたい。冒頭に申し上げた通り私にこのような文章を書かせた動機となったものは、BCL ブームがとおに去り、また無線やラジオ、短波放送といったものが一般の人々の中から忘れ去られ始め、そしてそうしたことを扱う書籍もこの世に殆どないという寂しさを憂いたことによるものであった。

20年間も中断してしまった私がこう言うのも甚だ僭越だが、私のBCLに対する愛情は本物であり真剣である。それだけにこの素晴らしい趣味が市民権を得ていない～特に科学技術に最も興味を持っている筈の青少年層に～ことはこの上なく残念なことである。確かにパソコン、インターネットの時代であり、音声だけでしかも電離層の影響を受けやすい短波放送はもはや合理的なメディアとは言えなくなりつつある。人々の興味関心は多様化し、ラジオ以外の娯楽が余りにも増えたことも事実である。また環境が悪化し、ローカル局はともかくDXを楽しめる環境が少なくなっていることも確かだ、この趣味が衰退せざるを得ないこともよく分かっている。

それでもラジオ1台あれば始められる気軽さ、遠く異国の地からの電波が日本に届くという不思議とロマン、そして受信するのが困難な電波を捉えるために工作をしたり場所を変えたりあらゆる工夫をしてチャレンジする面白さ・・・この楽しみをもっともっと多くの人に知って欲しいと思う。ブーム当時300万人とも言われた短波人口の人々が胸に抱いた海外放送への憧れは、普遍的なものではないだろうか。それに比べ

るとBCLの現状は、必要以上に冷や飯を食っているように思えてならない。ほんの少し刺激をしてやれば、多くの方がこの趣味に加わる或いは戻って来るような気がするのである

あの頃のような加熱したブームは二度と来る筈がないし、冷めてしまうブームなら来なくとも良い。ただ自分の願いは大人がこれだけ夢中になれる、非常にレベルの高い趣味があり、もっともっと沢山の仲間を作って楽しんでいきたいということだけである。そんな日が来ることを切望しているし、微力ながら今後もそれに向かって進みたいと思っている。

共感頂ける方が多く出現して、一緒に実現していければ、この上ない喜びである。

MY BCL LIFE

2004年1月1日発行

著者：Naka

1964年神奈川県生まれ。小学校5年生の時にBCLに出会い、中学～高校まで5年間熱中するも、高校1年で自然リタイア。以来20年間の長いブランクに入る。2000年11月にひょんなことから復活。以来3年間、復活前の5年間を上回る情熱でBCLに取り組む。2001年6月、BCLサイト「MY BCL LIFE」を開設。これからはリタイアすることなく、生涯この趣味と付き合っていくであろうと思っている。

無断複写・転載を禁ずる

